
ウィーゼルのネタ倉庫

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィーゼルのネタ倉庫

【Nコード】

N6392V

【作者名】

あいあむウィーゼル

【あらすじ】

これは作者がネタ段階にある作品を投稿しています。いわゆる「お試し版」みたいなものなので、お気楽にどうぞ。作品によってはアンチ成分を含むかもなので、ご注意を。暇な時に適当なネタを出していくので、よろしければどうぞ。

インフィニット・ストラトス その1（前書き）

今回のネタには以下の成文が含まれます。

「捏造」「転生者あり」「声が聞こえる」「IFの世界」「男の娘？」「微アンチ」「なにこれかわいい」

インフィニット・ストラトス その1

「一夏、大丈夫か!？」

「あ、ああ……………」

「逃げるぞ!」

突然の事に、彼は戸惑っていた。

いきなり自分を連れ去ろうとしていた男を、突然現れた友人が殴り飛ばしたのだ。

そのまま彼は自分の手を引き、走り出す。

「た、拓也…………… いったい、今のは」

「大方、千冬さんの弟のお前をどっかの国が組織が狙ったんだろ！
とにかく逃げるんだ!」

友人の手に引つ張られるままに走る一夏だったが、無意識のうちに疑問を感じていた。

彼が現れるタイミングが良すぎた。

自分が連れ去られようとしていたその瞬間、彼が現れ、自分を助けた。

まるで…………… そのタイミングを待っていたかのように。

(…………いや、友達を疑うなんて最低だな)

彼は自分を助けてくれた。

さっきの男は武器を持っていたし、下手をすれば自分達は撃たれていたかもしれない。

そんな危ない状況で、彼は自分を助けてくれたのだ。

「…………拓也、ありがとな」

「気にすんなって!」

…………しかし、一夏は知らなかった。

そんな友達である彼が、今現在どんな事を考えていたのか。

(よっしゃあああつ! 一夏を助けたわけだから、これで千冬姉フラグはいただきだな! 後は鈴フラグも……………)

この男、渋見拓也(通称シブタク)は転生者である。

前世ではごくごく普通の学生で、ちよつとばかりオタクと呼ばれる部類に入っていたが、それでも平々凡々な人間だった。

そんな彼が事故で死亡し、生まれ変わったら何と「インフィニット・ストラトス」の世界だった。

『これは神が、俺にオリ主になれと言っているに違いない』

そして彼は行動を開始した。

幸運は続いた。「インフィニット・ストラトス」の主人公である織斑一夏は、たまたま自分の家の近くに住んでおり、幸いにも友人としての地位を手に入れる事が出来た。

ヒロインである篠ノ之箒や鳳鈴音とも知り合う事が出来た。

容姿も悪くない。むしろイケメンと呼ばれる部類に入るだろうし、頭だって悪くない。

そして今回、一夏の誘拐を防ぐ事が出来た。……………後は、物語が始まるのを待つだけだ。

……………実はこつそり、ISが起動できる事は実証済みである。

後は一夏と同じタイミングで動かせる事が判明すれば、IS学園には入学できる。

（ぐふふ……………もうすぐだ。もうすぐ俺のバラ色なオリ主人生が待っている！）

……………しかし、彼は失念していた。

今回、織斑一夏の誘拐を防いだ事によって、織斑千冬は異例のモンド・グロツソ2連覇を成し遂げる事に成功する。

そしてそれは、本来起こるはずだった千冬のドイツ軍への出向は起きない事を意味している。何故ならば、一夏の誘拐時にドイツ軍からの情報支援によって、千冬は一夏の救出に成功したのだから。

つまりそれによって、1人の少女と千冬との邂逅も無くなり、本来の物語から大幅にズレていく事となる……………。

風峰陸斗には悩みがあった。

遺伝子工学界の寵児と呼ばれ、数々の偉業を成し遂げた彼であったが、どうにも出来ない相手が1人だけいた。それは…………。

「出てかんか、バカモノ!!」

夜にも関わらず、その怒声が響き渡る。

他の部屋の者が「何の騒ぎだ」と廊下に出ると、そこにはシーツを素肌に巻き付けた眼帯の少女と、こめかみに青筋を浮かべた白衣の男性の姿があった。

()()(またかよ…………)()()()

彼らの姿を見た瞬間、その場にいた全員の心は1つになった。
ここ最近、頻繁に目にする光景だ。最初の方は物珍しかったが、最近は慣れてきた。
むしろ、今度はどんな事をするのかが微笑ましくらいだ。

「ボーデヴィツヒ！ 前にも言ったが、裸でベッドに潜り込むんじゃない！！」

「しかし、クラリツサが言っていました！ 『裸で潜り込めば隊長の魅力に、ドクターも男性としての部分が正直になる』と」

「またアイツかあああああああああつ！！」

陸斗は天に向かって吠えた。

クラリツサ・ハルフォーフは極めて有能な軍人なのだが、こういったところがあつて困る。

22歳という若さにして、ドイツ軍所属の国家IS操縦者であり、特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の副隊長を勤め上げるほどの女傑なのだが、日本のサブカルチャーに造詣が深い。

それ故に、そこから得た「微妙に間違った知識」をラウラに吹き込む。ラウラ自身が特殊な環境で育ったため、一般常識に疎い部分があり、信頼する副官の言葉をそのまま鵜呑みにし、このようにストレートに愛情表現をする事が多々あった。

なお、誤解のないように言っておくが、当人に悪気は無い。ただ、どちらも本気だから質が悪いのだ。

「……………だいたい、何で俺なんだ。30歳以上年も離れてるし、子持ちだぞ？」

「そんな事関係ありません！　ドクターはお若いですし、とても魅力的です！！」

そう断言するラウラに、老若男女問わずに周囲の人間が「うんうん」と頷いた。

まず陸斗の容姿だが、とても43歳には見えないほど若々しく、30代……もしかしたら20代後半と言っても通用するかもしれない。そしてかなり整った顔立ちをしており、今は無精ヒゲを生やしているが、それもそれでワイルドな野性味を醸し出しており、なかなか似合っていた。

………ちなみに、軍の人間にも密かに彼のファンがいて、彼に想いを寄せるラウラのため、クラリッサ以下部隊員達が尽力していたのは公然の秘密である。

「いや、だから」

「……………どうでもいいけど、時間考えてくんない？」

気がつけば、黒髪の少年が自分達を見下ろしていた。

顔立ちは陸斗によく似ていて、瞳だけが碧い。そしてその目は………
…笑っていない。

「父さんもラウラも、痴話喧嘩は余所でやってよ。今何時だと思っ

てるのさ。ボク、ついさつき戻って来てようやく寝付けそうだった
トコなんだけど」

「く、玖楼……………？ その手に握ってる物騒なものは何だ」

「これ？ デュノアのおじさんからテスト頼まれたんだよ。とりあ
えず目の前のバカップルに天誅下そうと思っただけどうかな？」

ボソツと「答えは聞いてないけど」と付け加える。

そんな彼の表情に、周囲にいた者達は青くなつた。……………下手をし
たら巻き込まれる、と。

「その前に玖楼、1ついいか？」

「何さ」

「私の事は『お母さん』と呼べ。なお『義母上』はははつえでも可だ」

その空気を読まない発言に対する返答は、玖楼必殺のかかと落とし
だった。

そしてバカやつてた父親には、容赦なくパイルバンカーが撃ち込ま
れるのであった。

「……………というわけで寝不足なんだ」

『た、大変なんだね』

そんなこんなで朝を迎え、玖楼はあくびをしつつ、モニターに浮かんでいる少女にそう告げる。

そんな玖楼に対応している彼女は、どう答えていいか困ったような笑みを浮かべている。

『でも、おじさんもいい加減に素直になればいいのにね。本気で嫌なら、とつくにドイツから離れてるはずだし』

その辺りは玖楼も分かっている。

態度こそあだが、それでもラウラを本気で拒絶していないのは、陸斗自身も憎からず彼女の事を想っているからだろう。

「父さんも複雑なんだよ。ああ見えてフレドおじさんと同じ四十路で、歳も結構離れてるしさ」

『あ……………』

少女…………シャルロット・デュノアの父、フレデリック・デュノア。陸斗とは大学時代、机を並べた学友であり、年齢はほとんど変わらない。

唯一、フレデリックが年相応の外見であるにも関わらず、陸斗は20代後半ぐらいの若々しい姿を保っている事くらいだが（なお、同窓会で再会した際、「何でそんなに若い！」とドロップキックを決められたのは、ある種の伝説となっている）。

『確かおじさんが今年43で、ラウラが14だっけ』

「ほぼ30歳も離れてるから、そりゃ臆病にもなるよ」

『……………そうだね』

年の差の事を真剣に考えて、シャルロットは微妙な顔になった。

世の中には50歳近い年の差結婚を果たしたカップルもいるらしいが、それはさすがにごく少数だろう。

「そう言えばさ、進学どうするの?」

『うーん…………ほら、僕一応代表候補生でしょ? だからどうも、I

『S学園に行く事になりそうかな』

シャルロットのIS適性は高い。それも、フランス在住のIS操縦者の中ではダントツで、その操縦技量もまた、トップクラスである。それ故に、フランスの代表候補生として選抜されたのだが……その場合、年齢の事もありIS学園への編入が決定される。

「おじさん達は？」

『う、うーん……お父さんはともかく、お義母さんがね』

困惑した様子のシャルロットの言葉を聞き、玖楼は苦笑しつつ納得した。

シャルロットはフレデリック・デュノアの正妻の娘では無い。妾の子供で、2年ほど前に母親が病死した事で父親に引き取られたのだ。彼女の言う「お義母さん」とは、フレデリックの正妻の事で、シャルロットにとっては義理の母に当たる女性の事である。ちなみに関係は良好で、子供がいなかったためシャルロットの事を実の娘のように溺愛している。

そのため今回のIS学園行きにも難色を示しているというわけだ。

『まあ、洪々分かってくれた感じかな』

「おばさんとしても心配なんだよ。ヨーロッパならともかく、遠く離れた日本なもの」

IS学園が「何処にも属さない」とは言え、それを心配にする者もいる。

否、属さないこそそのメリットは大きいが、それ故に機密などの不確定要素も付きまとう事になる。

……唯一の救いが、現時点でISを動かせるのが女性だけで、従ってIS学園の人間もほぼ全てが女性である事なのだが。

『玖楼はどうする？ 一緒に来ればいいのに』

「……………隠し通せなければね」

玖楼は曖昧な笑みを浮かべた。

2年前のあの事件で、彼は顔が知られてしまっている。

政府の上層部は彼の存在を黙認しているような状態だが、このまま隠し通せるとは限らない。

隠し通せなければ……………シャルロットの言うように、そうなる可能性が高いだろう。

「一応こっちは親と相談。少なくとも同じタイミングで編入ってわけには行かないね」

『どつして？』

「国籍が曖昧だから」

その言葉に、シャルロットは納得した。
玖楼は幼少期から、姉や父と共に世界各地を行ったり来たりしている。

今でこそドイツの大学に客員教授として席を置いているが、10年ほど前までは風来坊も同然の生活を送っていた。

そのため、玖楼自身もどこで生まれたか知らず（陸斗曰く「南米か北米か……」その辺だったと思う「らしい」）、そのため国籍についても曖昧なのだ。現在、ドイツに在住しているとはいえ、国籍についても手続きし直さなければならぬので、進学するにしても時間はかかる。

「ま、それが終わったら編入かな。それまで待つてて」

『うん、楽しみにしてるね』

その後、矢継ぎ早に時間は過ぎる。

その間にも、とある少女と博士の微妙な関係にも終止符が打たれたり、某会社では第3世代の開発がようやく始まったり、少年は再び厄介事に巻き込まれたりするのだが、それは全て割愛する。

そして1年後、2人の少女が日本へやってきたところから物語は始まる。

インフィニット・ストラトス その1（後書き）

と言うわけで、ネタ第1弾です。

「こんなもん作る余裕あるんなら本編書けよ」ってツッコみは受け付けませんのであしからず。

私がラウラ関連の話で思ったのが、「一夏を助けに言ったから千冬は2連覇を逃した」というラウラが当初、一夏を憎んでいた理由。本文でも指摘しましたが、一夏が誘拐されたからこそ、ラウラは千冬と出会う事が出来たわけです。

しかし、もしも一夏の誘拐事件が起きず、千冬がモンド・グロツソ2連覇を成し遂げていたら？ その場合、ラウラは原作が始まっても「落ちこぼれ」のままだったかもしれません。

今回の話は、そんな「もしも」の世界で、ラウラが千冬とは別の人物と出会い、どん底から這い上がった話です。

オリジナル登場人物

玖楼・H・風峰

本編の主人公その1。風峰陸斗の息子。デュノア社で働く玲夜という姉がいるらしい。15歳。

身長は150cmにも満たず、小柄な体型がコンプレックスとなっている。

ISに乗る事の出来る男性で、世界で3番目に見つかったとされているが、実際の時系列では2番目に発覚していた。彼がISを動かす事の出来る理由は、彼の出自に関係あるらしいのだが……？
シャルロット・デュノアとは父親同士で親交があったため、幼なじ

みの間柄。なお、ラウラとの関係について1番複雑な気持ちを抱いている人物。

搭乗機は、第2世代「ラファール・リヴァイヴ」をベースにカスタマイズを施された「アズニール・ゼフィーレ」。

風峰陸斗

本編の主人公その2。玖楼の父親。

遺伝子工学の寵児として名を轟かせており、現在はドイツの某大学に客員教授として席を置いている。軍隊式格闘技の達人。

かつて、ヴォーダン・オージェの不適合によって落ちこぼれていたラウラに、制御方法を遺伝子レベルで解析・伝授したことから「ドクター」と敬意を寄せられており、現在は強い愛情を抱かれている。

原作開始時にはラウラと婚約しており、その事で周囲からは「ロリコン」と呼ばれている（ラウラは微妙に勘違いして、「親しみを込めてそう呼ばれている」と思っている）。

渋見拓也

転生者にしてオリ主（笑）。一夏の友人でサード幼なじみ。世界で2番目に発見された男性IS操縦者。

実力は高いのだが、すぐ調子に乗るためそれを出し切る事が出来ない。なお、筆記試験では10位内に入っていた。

ハーレムを作るべく奔走するが、うまくいかない。根本的なところでお人好しなので、目の前で誰かが困っていると思わず手を差し出してしまふ。

オリジナルIS

アズール・ゼフィーレ

玖楼の第2世代型ISで、ラファール・リヴァイヴをベースに改造が施されている。

基本武装である二丁拳銃「タイガー・ピアス」は速射性に優れており、また相手の近接攻撃を受け止める事も可能（イメージとしてはガンダム00のケルディム）。全身に多数のミサイルポッドを搭載している他、右肩に大型のビームランチャーを装備。射撃兵装をメインに搭載しており、高火力・重装甲をイメージさせるが、機体各所に追加されたブースターにより、高い機動性を実現している。しかしその分、出力がピーキーになってしまい乗りこなすには相応の技量が必要とする。

玖楼の持つ「ある能力」に応じた特殊なシステムを搭載しているようだが……………？

幻想に生きる者 i n リリカルなのは（前書き）

これは以前、ちょっとだけ書いていたIF物の連載版です。

9話ぐらいまで書いて放置してあったので、とりあえず投稿してみます。

幻想に生きる者 in リリカルなのは

足下に魔法陣のようなものが展開され、光が天へと上る
……… 光が晴れ、そこに残ったのは俺だけだった。

「ふっ」

ん、と身体を伸ばし、旅の疲れを取る。
とはいえ、これで全部消えるほど柔なものじゃないのだが。

「陸斗、おかえりなさい」

と、そう言っただけで俺に近づく影が1つ。
肩口で切りそろえられた青紫の髪。ルビーのように鮮やかな瞳。羽衣のようなものを纏っているのが特徴的だ。

「ただいま、衣玖」

「お疲れ様です。……… どうでしたか、今回の件は」

「ま、大変だったよ。いきなりこっち来たと思ったら無理矢理連れて行かれたし」

家にいた時、いきなり押しかけてきて理由を言わないまま連れて行かれて…………。

まあ、事情が事情だったから怒りはしないが、それでも少しは説明して欲しかった気がする。

「どちらにせよ、宴会の用意でもしてるんだろ？ そっちで詳しい事は話すさ」

アイツらの事だ。俺がいきなり連れ去られた事を知って、それを準備してるに違いない。

最初の頃はそれなりに混乱してたが、最近はかなり落ち着いてきたし。

そう、最近なんて普通に「どんな戦いだったか」っていう風にトトカルチョなんてやるようになった。

…………とりあえず、主犯は分かっている。後で分け前を没収するかいいとして…………。

「それで陸斗、例の“隠し子”について詳しくお話を聞かせてくれませんか？」

…………ああ、そう言えばそうだったっけな。

その話をしてる最中に連れて行かれたんだし。有耶無耶になったのを忘れていた。

「その……………黙秘権は？」

「却下です」

につこり微笑み、彼女は死刑判決を下したのだった。

[Side Out]

[Side Yukari]

1年ほど前、だったかしらね。
陸斗が外に出かけている時に、とんでもない大事件に巻き込まれたのは。

私も詳しく聞いたわけじゃないから、そこまで深く知らないのだけ

ど。

「それにしても、今回は運がなかったわね」

「……………つつさい」

見事に黒こげになった陸斗は、私の前で酒を飲んでいる。

今回、あの娘に連れて行かれたのは、ちょうど「隠し子」疑惑で衣玖と話し合ってる最中だった。

タイミングがいいのか悪いのか分からないけど、とにかく帰ってき
てから碌な目に遭わなかったとだけ言っておきましょう。

「それで結局どうなったのかしら？」

「どうにか理解してもらった。……………そこへたどり着くまでに何とか電撃喰らったし、締め付けられたが」

陸斗の「隠し子」疑惑。

まあ、噂の出所は分からないけど、何十年か前に魔界へ出張した際、魔界神と関係を持ったとか（この子の事だから、きつと一服盛られたか、夜這いかけられたかでしょうけど）。

多分だけど、その時に彼女が身ごもって、それで色々あった……と
なお、陸斗はその事についてほとんど知らなかった。……………つい先日、当の本人から「認知してください」という手紙を受け取るまでは。

「近い内に会ってくる。さすがに会わなきゃダメだろうし」

そりゃあそうよ。

それで放置していたら、あなた男として最悪だし。

「そうそう、それが終わってからでいいんだけど……1つ頼まれてくれない？」

「何だ？」

「ちょっと厄介事が起きてるみたいなのよ」

幻想郷の正確な位置については、ちょっと話せないけれど……その土地が誰の所有になっているのかと疑問に思った事は無い？
実は、幻想郷を表から守護する一族というものが存在している。
その血に“人でないモノ”のそれを引く者達。血統的には私たち人外の存在に近い者達が、表側から幻想郷を護っている。その1つに“夜の一族”と呼ばれる……まあ、吸血鬼の一族がある。吸血鬼と言っても亜種であって、人間の延長線上に在るだけなんだけど。

「夜の一族……懐かしいな。何年か前に騒動の後始末に行ったっけ」

陸斗が言っているのは、6、7年ほど前に起きた“血の反乱”事件。

一族の1人が引き起こした事件をきっかけに、人間に対して不満を持つ者達が決起しようとした事件。

もちろん、事前に抑え込まれたから反乱自体が起きずには済んだけれど、私たちとしてはしっかり監督してもらわなければ困るわけで、嚴重注意という結果に終わった。

……で、陸斗はその後始末。1番最初に起きた事件の事後処理を担当したわけ。

「今回、私たちに助けて欲しいっていう要請があつたのは、月村家。例の綺堂家とは親戚に当たるわ」

詳しい事は向こうから聞いてもらえれば分かると思うけど、何でも在住している街で怪現象が起きているらしいのよ。

謎の爆発事故が起きたり、大樹の根が突然暴走したり……。

何らかの怪異が関係している可能性があるから、調べて欲しいって。

「なるほど……わかった。向こうから帰ったらすぐに向かう」

「ええ、お願いね」

とはいえ、簡単に話がついてくれればいいけど。

……なお、意外にも話は早く終わり、陸斗は翌日には外へと旅立ったのだが、疲れ切っているようにも見えたのは私の気のせいかしら？

[Side Out]

[Side ???]

最近はどうも、妙な事件ばかりが起きている。
愛さんの病院が謎の爆発事故に見舞われたり、大木の巨大な根っこ
が突然暴走したり……。
そう言えば、変な声が聞こえたりもしてましたっけね。「助けて」
って。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「いえ、最近の事件について考えていただけです」

2歳年下の我が妹、理音^{りのん}に対してそう答える。

「……………ま、単なる事故つてわけじゃないのは確かだけど」

と、ショートカットな銀髪の女性……………リスティ槇原さんがこちらへと
ていうか、ちゃんと服着てくださいよ。胸はだけて……………だらしない
ですよ？

「いいじゃん。耕介だって出かけてるし。……………で、玲夜としては
どう思うわけ？」

「何かしらの力が作用した、と考えられます。……………リスティさん
も気になります？」

「そりゃあね。発表にはガス管の破裂つて事になってたけど、実際
に現場を見たボク達からすればそれはあり得ない」

となるとやはり……………何らかの意志がそこに働いている、というわけ
ですか。

「……………それに、愛の病院をあんなにしておいて、ただで済ますわけ
には行かないし」

静かにそう言っているけども、リステイさんの瞳の奥にはしっかりと怒りの炎が灯っている。

怒るのも無理は無い。被害に遭ったのはリステイさんのお義母さん…… 槇原愛さんが院長を務める病院だから。

「家族の“夢”を目茶苦茶にされて、それで怒らないはずが無いよね。お姉ちゃんも怒ってるみたいだし」

「……………やっぱり分かる？」

理音はこう見えて、なかなか鋭いところがある。

…………… 私たちがここに暮らすようになって、もう1年が経とうとしている。

1年前、私たち姉妹はちょっとした事件に巻き込まれ、それで色々あって、ここ「さざなみ寮」で暮らし始めている。リステイさんを始めとする、さざなみ寮の人達は私たちにとって、家族も同然。家族の夢を蔑ろにされて怒りを覚えないはずが無い。

「……………」

「理音、どうかした？」

「…………… ねえ、1年前のアレが関わってるって事、無いよね？」

理音のその言葉に、私たちは凍り付いた。

1年前のあの事件。普通では考えられない、超常的な力が関わって

いたあの事件。

確かに、あそこまで常識外れなモノが関わっている可能性は充分にあり得る。

「おじさんなら、何か知ってるかな？」

「……………可能性としてはあり得るかもしれませんがね」

理音の言う「おじさん」というのはきつと、1年前に私たちを助けてくれた人の事。

私が密かに憧れている人物でもある。一言で言い表すならば、ハードボイルドを体現しているダンディなお人だ。

1年前から何度か相談に乗ってもらったりしているので、連絡を取る事はそう難しくは無い。

「後で電話して、話を聞いてみます」

「それがいいかもね。ボクはもうちょっと違う側面から探りを入れてみる」

ここまで超常的な事象が続発しているのだから、アレが関わっている可能性はあり得る。

もし、アレで無いとしたら……………それこそ、魔法とも言つべき事象なのかもしれない。

普通ならば頭ごなしに否定すべき事なのでしょうけど、生憎さなみ寮と付き合っているとそんな考えは吹っ飛んでしまう。

……何せ、完全に常識から逸脱しているお方が何人もいるし、極めつけには……。

「あ、クーちゃん」

理音の膝の上に飛び乗ると、丸くなる子狐が1匹。

……この子の事知つてるとさすがに私も考え方変わりますよ、そりゃあ。

つい半年ちよつと前にも色々ありましたし。

「……………あ、そろそろ診察の時間じゃありません？」

時計を見ると、既に時刻は3時を回っていた。
4時から理音の診察の予約を入れていましたっけ。時間を過ぎると混んじゃいますし、早くしないと……………。

「リステイさん、車出してもらっていいですか？」

「いーよ。んじゃ着替えてくるから、先に乗ってて」

そう言い、私に車のキーを投げるリステイさん。

それを受け取ると、私は理音の車椅子を押して車庫へと向かう。

……この子は小さい頃、事故に遭って足を悪くした。それ以来、ずっと車椅子に乗って生活を続けている。

もちろん、気長にリハビリを続けてきているので、少しずつではあるけれども改善されつつある。特に最近は回復が良く、真面目に続ければ数年以内に歩けるようになる、主治医のフィリス先生は言ってくれた。

（私が絶対守りますから）

私は、この子のお姉ちゃんですからね。

[Side Out]

[Side Rikuto]

「あー、とりあえず初めまして。そっちのお嬢さんは「久しぶり」。
風峰陸斗だ」

魔界から戻った俺はすぐさま、月村家が在住する街……海鳴市を訪れていた。
大変だった。そう、大変だった。それ以上は聞かないでもらえると
1番嬉しい。出来れば思い出させるな。

「ええ、お久しぶり」

そう答えたのは桃色の髪を垂らした、20代半ばぐらいの美女。
彼女は確か、綺堂さくら……だったか？ 以前の事件でちょっと
顔を合わせた事があるが、その時と比べてかなり成長したものだ。
続いて口を開いたのは、彼女の隣に座っていた少女。年頃は、大学
生くらいだろうか？

「初めまして、月村忍です。本当なら父母が挨拶すべきところですが、今はちょっと留守にしていますので」

「いや、構わない。それより、事情を聞かせてくれないか？」

真剣な顔で忍が語ったのは、紫から聞いていた事とほとんど同じ事
だった。

しかし、事件が起きる数日前、街全域に奇妙な物体が降り注いだら

しいという話は初耳だったが。

「それがどういうものかっているのは？」

「残念ながら、詳細は不明です」

ふむ……………それが今回の事件と何らかの関わりがあるかもしれないな。

少なくとも、それは可能性の1つでしか無いが、手がかりの1つでもある。

とはいえ、俺はあまり探査能力には突出していない。探す時は、栞辺りでも借りてきて頼むとするか。

「では、明日から調査を開始したい。やはりこちらに在住した方がいいか？」

「そうね……………出来れば、そっちの方がいいかもしれないわ」

なら、どこか物件を紹介してもらう必要がある。

念のために言っておくが、これでも俺たちはそこそこの金を持っている。

他の連中ならともかく、俺や紫は外でも活動する事が多々あり、その関係で色々と物入りがあるわけだ。

……………ちなみに、普段は神主様が管理してくれているので安心……………
…なのか？ 正直、あの人に任せていると、全額酒代に飛んでいき
そうで怖い。

「それならこの家に住めばいいのに」

「それだけは遠慮したい」

さすがに魔界であんな事があつてすぐ、美女の住まう屋敷に泊まり込むわけには行かない。

そうしたら確実に、衣玖が「氷点下以下の冷たい目」で俺を見るに決まっている。そして今度は超電磁砲レールガンが飛んでくる（アレは半端無く痛い）。

「分かったわ。適当な物件を見繕っておくから」

「よろしく頼む」

さてと、しばらく単身赴任という形になりそうだな。
どちらにせよ、忙しくなりそうだ。

幻想に生きる者 in リリカルなのは（後書き）

【登場人物紹介】

風峰陸斗

種族：妖怪

保有能力：虚無を司る程度の能力

博麗大結界創建に携わった、幻想郷の賢者の1人。

実年齢は不明だが、相当長い年月を生きている妖怪。八雲紫とは旧知の仲で、彼が力ある妖怪に成長するまでを知る数少ない相手であり、何かと逆らえない相手でもある。彼の本性と伝承を知る者からは「空に坐す者」と呼ばれる。

永江衣玖とは夫婦で、既に半世紀近くを共に過ごしているが、陸斗自身が女性に好かれやすい性質のため、常にやきもきさせている。なお、隠し子騒動においては相当絞られた。

最強夫婦 in インフィニット・ストラトス（前書き）

最近、ISのアンチ物で「白騎士事件で家族を失う」という設定のものを見ます。

そこで考えてみたのが、同じ設定のこの話。

主人公は「御狐様」の玖楼と瑪瑙。

タグを付けるとしたら「アンチ」「復讐」「最強」「毒舌」「捏造」とかでしょうか？

最強夫婦 in インフィニット・ストラトス

それは単なる気まぐれだった。

強い悲しみと絶望。そして憎悪。

彼女は単純に興味湧き、ただ単にその対象を見に來ただけだった。

そこにあつたのは、血の臭い。

圧倒的な熱量によって焼き尽くされても、彼女にはそれが感じられた。

その中心にいたのは、1人の少年。

物言わぬ肉塊と成り果てたモノに縋り付き、ただ泣き喚いている。

彼女が感じた強い感情は、全て彼から放たれている。

まだ10歳も迎えていないであろうその少年から、全て放たれていたのだ。

面白い。とても面白い。

彼女はそう思い、そっと少年の後ろに降り立った。

「力が欲しいか？」

そう問いかけると、少年は身体を震えさせる。

「そなたから全てを奪った者に、復讐する力が欲しくないか？」

少年は何も答えない。だが、彼女はさらに続ける。

「そなたは全てを奪われた。家族、夢、想い……ならば、今度はそなたが奪ってやればいい」

彼女の言葉は甘美な毒のようになり、少年の心に入り込む。

別に少年に同情してそんな事を言っているのではない。

彼女は思ったのだ。今の時点でここまで強い憎悪が、もっと強くなるところを見てみたいと。

その燃え上がった復讐の炎が、咎人をどのように焼き殺すのか。：

……それが見たいと彼女は思っただけだ。

「……………欲しい」

「何が欲しいんだ？」

「欲しい！　こんな事を引き起こしたヤツに、父さん達を殺したヤ

ッに、復讐する力が欲しい！！」

少年の目が、真っ直ぐ彼女を射抜く。

その瞳に宿るのは、強い憎悪の光。

種は蒔いた。これから先、もっと強いモノへと変わっていくだろう。

「いいだろう。そなたが望むモノ、妾が全てくれてやる！！」

後に「白騎士事件」と呼ばれるあの日から、私が私になってから8年が過ぎた。

その間にも、世界は大きく揺らいで行った。

インフィニット・ストラトス。通称IS。

元は宇宙開発用のパワードスーツだったそれは、この世界を大きく歪ませた。

男尊女卑ならぬ女尊男卑。

ISは女性にしか動かせないという欠点。それにより男性の立場は大きく低下し、俗に男の誇りと呼ばれていたものは地へと墜ちた。

8年前、たった2人の少女によって、今の世界は創られた。

（篠ノ之束と、織斑千冬）

ISの開発者である、社会不適合者。それが篠ノ之束博士。

間違いなく数十年に1人の天才であろうその女性は、何を考えたのか各国のコンピュータにハッキングをかけ、日本へ向けておよそ2000発ものミサイルを一斉発射させた。

それを迎撃し、圧倒的な性能を見せつけたのが「白騎士」。世界で初めて確認されたISである。

「白騎士」はミサイルの迎撃後、各国が送り込んだ戦闘機などの現行兵器の大半を撃破。その後行方をくらました。

そしてその「白騎士」の正体こそ、世界最強と謳われた織斑千冬で

ある。

ISによる国際大会「モンド・グロッソ」。その第1回大会に日本代表として出場し、たった1本の近接用ブレードと武器に頂点へと至った。

第2回大会でも決勝戦へと至ったが、突如出場を棄権し、その後謎の引退。現在はIS学園で教鞭を執っている。

『何かを得るためには、同等の代価が必要となる』

この言葉を聞いたことのある人は多いだろう。

某錬金術漫画でも耳にする「等価交換」の法則。質量1の物を得るには、同じく質量1の物を必要とする。

同じように、何かを為し得るためには同等の何かを必要とする。それは時間であれ、積み重ねであれ、様々だろう。

この法則で言えば、彼女達には世界を変えた代価が必要となる。

「だから今度は、私が奪う番」

奪われたのだから、逆に奪ってもいいでしょう？

先に手を出してきたのは向こうなのだから、答えなど聞いていない。

目の前で奪われたのだし、今度は彼女達の目の前で奪ってやるのも面白いかもしれない。

大切なものを奪われ、彼女達はどんな表情を浮かべるのだろうか？ 私と同じように憎悪に支配されるか、それとも全てに絶望するのか？

その光景を浮かべ、思わずくすくす笑ってしまう。

「……………妙にご機嫌じゃのう」

そう言いながら、こちらへ寄ってくる女性が1人。

彼女の名は瑪瑙。対外的には私の名字を使い、遠縁の人間である神崎瑪瑙を名乗っている。

無力だった私に、力を与えてくれた……………共犯者と呼ぶべき存在だ。

「だって、もうすぐお預けの時間が終わるんだもの。楽しみで楽しみで……………」

ここまで来るまで8年かかった。8年も待った。お預けの時間はもうすぐ終わる。

「そう言えば、明日だったか。そのあいえず学園とやらの入学試験は」

「ええ」

明日、私はIS学園の入試を受けに行く。

とはいえ、日本の代表候補生として選抜されているため、筆記試験はパス。実技試験だけとなる。

実技試験はIS学園の教員と模擬戦闘を行い、その戦闘状況によって成績が変動する。例えば負けたとしても基準要素を満たしてさえいれば及第点は取れる。……まあ、新入生程度の実力では教員を倒すには至らない。代表候補生レベルでなければ勝利する事は難しいですよ。

「……………む。同じ日に藍越学園とやらの入試も行われるのか」

当日日程の書かれた用紙を眺めていた瑪瑙がそう呟く。

あ、そうみたいね。

何でも藍越学園は学費が安く、就職率の良さが有名な高校らしい。その分倍率も高いらしいけど。

隣り合わせの会場だから、試験会場を間違えないようにという注意書きも書かれているけど……………普通、間違えるバカはいないでしょ。

「いや、分からんぞ？ 案外、藍越学園を受けに来たヤツがIS学園の入試を受けたりするかもしれん」

「“あいえつ”と“あいえす”を間違えて？」

「うむ」

顔を見合わせて、思いつきり笑った。

確かに響きは似てるけど、いくら何でも間違えるバカがいるなんて思えない。

「さて、と」

端末を操作すると、空中にウィンドウが表示される。

そこに記載されているのは今年度のIS学園入学者リスト。こっちは既に入学が決定している者のリストとなっている。

早くに試験を受けていたり、諸事情から試験を免除されていたり…

……もしくは、試験が形だけのものだったり。

もちろんこんなもの、普通にやっただって手に入るものじゃない。色々と回りくどい手を使うハメになった。……もちろん、その甲斐はあったのだけでも。

「玖楼？」

「……………何でもないわ」

明日は入試だし、
そう長く起きているつもりは無いし、
そろそろ寝
ましようかね。

最強夫婦 in インフィニット・ストラトス（後書き）

神崎玖楼

本作の主人公。15歳。

8年前の「白騎士事件」で家族を失い、瑠璃と出会い、復讐のための力を望む。

日本の代表候補生でもあり、次世代型量産機として見込まれる謎の機体を専用機に持っているらしいが……。

性別は男性だが、普段は女性の姿をしている。どのような経緯で代表候補生になったのか、またどのような方法でISを操縦しているのかは不明（しかし、普通の人間には不可能な方法でそれを可能にしている事は明らかになっている）。

篠ノ之束と織斑千冬に対する憎悪は極めて強く、「奪われたのだから今度は奪う」と公言している。

神崎瑠璃

本作の主人公の1人。年齢不明。

8年前の「白騎士事件」で家族を失った玖楼の前に現れ、力を望む玖楼に応える。玖楼の前に現れた理由は、人一倍強い負の感情を感じたため。

どうやって玖楼の憎しみを感じたのか、また彼女がどういった存在なのかという事は不明。

現在は玖楼と同じ「神崎」姓を名乗り、対外的には玖楼の遠縁という事になっている。

登場人物紹介です。

いくつかISのネタはあるんですが、どう書いていくかで悩んでる

んですよ。

読者がどんな話を望んでるか分からないところもありますし……。
この続きを読みたいという方がいたら、執筆してみますので。

B A D E N D から始まるストーリー (I S) (前書き)

最初は「幻想に生きる者 i n I S」で書いてたんですけど、何だかいつの間にB A D E N D になってました。

何でこうなったのか……私にも分かりません。

ただ1つだけ言わせてください。…… I S に東方成分を混ぜ込むのは不可能に近いかもしれない。

BAD ENDから始まるストーリー（IS）

私の目に飛び込んで来たのは、血溜まりの中で妹を抱き、呆然とする弟の姿だった。

「一夏、しっかりしろ一夏！」

「…………ちふゆ、ねえ？」

呆然とした表情はそのままだが、呼びかけると私に気づいた。

「千春が…………千春が…………俺を、庇って」

「ッ！？」

一夏の腕に抱かれた妹を、信じられない表情で見やる。

腹部から夥しい血が流れ、千春のワンピースは最早、何色だったかが分からない。

出来る限り冷静に、千春の首筋に指を当てて脈を取る。

…………まだ息がある。その事実思わずホッとするが、すぐ止血しなければ命が危ない。

適当な布が無かったので已む無く一夏の服を脱がせて、それを傷口に押し当てる。くそ……血が止まらない。

すぐにでもどこか治療の出来る場所へ運ばなければ……。

「千春をこのまま病院へ運ぶ。もう少ししたら軍が来るから、お前はここでじっとしてるんだ、いいな？」

「あ、ああ」

一夏が頷くのを確認し、そのまま飛び立った。

「……………」

手術室の前で、力なく項垂れる千冬。

……モンド・グロッソの決勝戦を放棄した事など、どうでもいい。
今はただ、妹の無事を祈ることしか出来なかった。

「……………何が、世界最強だ」

弟たちは誘拐され、妹は撃たれた。……………自分の家族すら、守れてもいない。

「織斑君」

その声に顔を上げると、そこにはスーツ姿の中年男性の姿があった。
名前までは記憶していないが……………委員会の人間だ。

「話は聞いている。弟さんは保護されて、こちらへ向かっている」

「……………そうですか」

「決勝戦だが、延期される事になった。……………もしかしたら、このまま中止になるかもしれないが」

姿を消した国家代表が、突然血まみれの妹を病院へ連れ込んだのだ。騒ぎにならないはずがない。

既に委員会の方へ事態は伝わっており、マスコミや各方面への根回しはされているが……恐らく、メディアへの拡散は防げないだろう。

だが、中止になってくれる方が千冬にとってありがたかった。

こんな状態で戦えと言われても困る。戦えるわけがない。

その辺りは男性も分かっているらしく、とやかく言わなかった。

「妹さんの様子は？」

「……元々、あまり身体の強い子では無いので」

手術に耐えられるか分からない。

力ない声でそう答えると、男性も「そうか……」と小さく返した。

千冬や一夏とは違い、千春は運動が苦手で、どちらかと言えば病弱な部類に入る。そんな千春が手術に耐えられるか……。

……手術開始から2時間、ようやく「手術中」のランプが消えた。

中から暗い表情を浮かべ、手術着の医者が出てくる。

「先生、妹は……………」

「……………手は、尽くしましたが」

そう言い、首を横に振る医師。

それだけで分かってしまった。だが、信じられない。信じられるはずがない。

千冬はそのままよろよろと、手術室の中へと立ち入る。

「千春……………」

手術台に寝かされているのは、瞳を閉じたままの妹。

けれど、その瞳が開かれる事は……………もう、無い。

「織斑君……………」

「……………少し、2人だけにしてください」

千冬の言葉に、医師達と顔を見合わせ、男性はその場を後にした。

手術室の扉は閉じられ、その空間は千冬と千春の2人だけのものになった。

「嘘だと、言ってくれ」

いつものように、微笑んで欲しい。

でも、それはもう叶わない。

「あ、ああ……………ああああ」

千冬の口から嗚咽が漏れ出す。

立ってられない。そのまま膝を突き、嗚咽を止める事も出来ない。

「千春……………ちはるう……………」

物言わぬ妹の前で、彼女はただ泣き続ける。

……………この日、織斑千春は12歳の若さでこの世を去った。

そしてそれが、織斑姉弟の物語を大きく揺るがす事になる……………。

BAD ENDから始まるストーリー（IS）（後書き）

オリキャラ紹介

織斑千春

織斑一夏の双子の姉。見た目は千冬似だが、キレイ系よりカワイイ系。非転生者。

千冬や一夏とは違い、運動が苦手で病弱。内向的で大人しい性格で、鈴とは親友と言っていていい間柄だった。

第2回モンド・グロッソ決勝戦において、一夏共々誘拐されてしまい、経緯は不明だが一夏を庇って銃弾を受け、救出に來た千冬によって病院へ搬送されるが、死亡する。享年12歳。

……………あれ、死んじゃってますね。

どうしてこうなったのか、私にも分からないんです。

ただ、彼女の死が大きな波乱を呼びます。具体的に言つと、一夏や千冬の今後はもちろん、他の面々にも影響を与えます。

そして千春自身も……………。

タイトルから分かるかもしれませんが、この後の展開を希望する人は感想を。

ネタから出た誠：織斑千春in幻想郷（前書き）

というわけで、ネタから出た誠です。お待たせしました。

これは「BAD ENDから始まるストーリー」を出した際、感想で「幽々子が赤ん坊になった千春を抱いて、パパと呼ばれた陸斗が衣玖に黒こげにされる」というアイデアがあったため、実際に書いてみたものです。

なお、これを連載する事は現在考えていません。

ネタから出た誠：織斑千春in幻想郷

確かに俺は、世間一般で言う「女誑し」なんだろう。

普通に女の子から好かれてるって自覚はあるし、その辺りを何度も嫁から責められ、その度に黒コゲになってるわけだから。

でも、これだけは覚えておいてほしい。今の俺は衣玖一筋だ。自分の意志で浮気したりとか、そーゆー事は夫婦になってから一切してない。

……何でこんな事をここで強調しているかと言うと、

「きゃっきゃっ」

「はーい、お母ちゃまですよ」

俺の視界の右端にいるのは、赤ん坊を抱いた古くからの友人、西行寺幽々子。

その隣には、扇子でにやにやしてる顔を隠してる、我が育ての親、八雲紫の姿もある。

「……………陸斗、そろそろ観念して自白したらどうですか？」

そして今現在、俺を羽衣で締め上げてるのは我が最愛の妻、永江衣玖。

頼むから……そろそろ離して欲しい。いくら俺でもここまで強く締められたら窒息する。

「だから俺は……無実だ」

「本当ですか？」

ジト目でこちらを睨む衣玖。

……確かに、疑われる余地があるのは……否定出来ないけど。

でもだからって、幽々子とそういう関係になるはずがない。だってアイツ、俺より年う……。

「何か言った？」

さっきまで赤ん坊に向けていたのと同じ笑顔で、こちらに顔を向ける幽々子。

……何故だろう。その笑顔からは恐ろしいまでの威圧感を感じてしまうのは。

「ナンデモアリマセン。キットソラミミデシヨウ」

「あら、そう」

威圧感が収まり、幽々子は再び赤ん坊をあやし始める。

何でこんな事になっているのか。

そもその始まりは数時間前。いきなり冥界のこの白玉楼まで呼び出され、何かと思い訪ねてみると……………。

『ほぐら、パパでちゅよ』

赤ん坊を抱いた幽々子の第一声。

……………その一言が、周囲を恐ろしいまでに凍て付かせたのは言うまでもない。

どうにか思考が元に戻り、逃げようとした瞬間、氷点下のごとく冷たい目をした衣玖と妖夢に取り押さえられたのも言うまでもない。

「まあ、『冗談はさておき」

「冗談！？ 今までの隠し子とか、パパとか、全部冗談ですか！？」

すっかり騙されていた妖夢が、ポロツと呟いた紫にくっかかる。

……てかお前、幽々子の側に何年いるんだよ。子供出来たら分かるだろ。そもそも亡霊は妊娠しないし。

「とりあえず、衣玖もそろそろ離してくれ」

「…………ええ」

しゅるしゅると羽衣が俺の身体から離れていく。

俺と幽々子の間にそういう感情は一切無い。どこまで行っても友人という括りから外れないだろうから。

その辺りはきつと、衣玖も分かってたはず。なんだかんだで夫婦になって数十年経ってるわけだし。

(……………やっぱ、アリスの事かな)

数年前に発覚した「隠し子」疑惑。……………疑惑じゃなかったわけだが。

ちょっと昔に魔界へ行った時、魔界神に一服盛られ（普通の薬は効かない身体のはずだが）、夜這いかけられ、三日三晩搾り取られた。

へろへろになった俺を待っていたのは、やっぱり欲求不満になって

いた衣玖で……あの時ほど「服上死」という言葉が頭の中にリフレインした事は無かった。

そして数年後、すっかりそんな事も忘れてた頃に……嵐はやって来た。

『ほら、この人がアリスちゃんのお父さんよ?』

『……………パパ?』

突然やって来た、魔界神と人形を抱いた金髪の女の子。

その時、衣玖が側にいた事が運の尽きだった。……………あの時は本当にヤバかった。羽衣でグルグル巻きにされ、博麗神社で査問会まで開かれたし。

そんな査問会の様子が、リアルに「文々。新聞」に「一級フラグ建築士、今度のお相手は魔界神?」という見出しで掲載され、しばらくの間里を歩けなかった(幻想郷縁起に書いていいかと聞かれ、それだけはやめてくれと土下座した事もあった)。

(子供、出来ないからな……………)

俺は妖怪としてはかなり特殊な部類に入る。

そもそも、異なる種の妖怪同士で子供が作れるのかという疑問もあ

った（アリスの時は、アイツが自分で何かしたのかもしれない）。

紫に頼めば境界弄って一発でどうにかなるかもしれないが………やっぱり、そういう事は出来ればしたくない。

そつと衣玖の肩に手を回すと、何も言わずに寄り添ってきた。

「……………いいかしら？」

「どうぞ」

さつさと本題に入ってくれ。いったいなんなんだ？

「あなたの事だから、その子が「成り立て」っていうのは分かっているわね？」

……………まあな。

妖怪が生まれる方法はいくつもあるが、その赤ん坊のように「人間」から「妖怪」になるのは極めて珍しい。

人間から「魔法使い」になる方法はあるが、妖怪になるハッキリとした方法は無い（紫なら何か知ってそうだが、何故かその話に関してはいつも複雑そうな顔をする）。

そしてその赤ん坊は、人間から妖怪になった「成り立て」だ。それ

もかなり特殊な……。

「閻魔様から預かったんだけど、どうもこの子1度死んで、魂が妖怪化する際に乳児化しちゃったみたいなの」

「は？ それどういう事なんだ？」

少し躊躇ったようだが、紫は語り出した。

赤ん坊 人間だった時の名は、織斑千春だったそうだが、弟を庇って死んでしまった事。

何の因果が分からないが、魂の状態から妖怪への転生を果たした事。

そして……何故か赤ん坊の状態からのリスタートになった事。

「どうも今回のケースは初めてみたいで、冥界じゃ大騒ぎらしいわ。妖怪になっちゃったわけなんだし、こっちで面倒見るって形で落ち着いたんだけど……」

「それと俺たちに何の関係があるんだ？」

「ぶっちゃけると、この子の世話お願い出来ない？」

紫の言葉に、思わず顔を顰める。

いや、確かに子供の世話は手慣れてる方だけど、いきなりすぎるだろ。

「あなたぐらいしかお願い出来ないのよ。冥界はあまり生きている妖怪が暮らすのには優しい環境じゃないし」

……そりゃあ、そうだけど。

かと言って、俺一人の意見では決められない。これでも一応妻帯者だぞ？

そう思い、隣にいる衣玖を見る。

「私は構いませんよ？」

「……………」

……………まあ、仕方ないか。

さて、ここで1度外の世界の事について触れる事にしよう。

織斑千春が死んだ事による、本筋への影響。それは決して小さい物では無かった。

その影響が最も大きく出たのはやはり、彼女の姉……織斑千冬だろう。

普段、弟と妹に姉としての威厳を持って接していたが、彼女が2人に対して抱く愛は本物で、千冬にとって千春と一夏は「守らなければならぬ宝物」であった。

しかし、その片割れは永遠に失われてしまった。

それが千冬にもたらしたショックは甚大で、帰国後の彼女は「世界最強」と呼ばれた頃とはまるで別人のように衰弱し、ついには寝込んでしまったのだ。

そんな彼女を献身的に支えたのが、弟の一夏である。

千春が自分を庇って死んだ事に、千冬と同じ……或いはそれ以上の衝撃を受けた彼は、何も出来なかった弱い自分を恥じ、鍛錬を始めた。

しかし、無茶な鍛錬に乗り出し始めた頃、友人である鳳鈴音と五反田弾から肉体言語を伴った説教を受け、自分なりの強さというものに気づき、未だ立ち直れない千冬を支える事を決意したのである。

一新した一夏の様子に、周囲の人間も安心したが、いくつか失念している事があった。

まず第一に、千冬は弟と妹を大切にしている。周囲にはひた隠しにしているが、立派なブラコン & amp; シスコンである。

第二に、一夏は悪い意味で鈍感だ。特に自分に寄せられる好意というものには一切気づく事なく、自分自身の感情にも極めて鈍い。

……そんな一夏が愛する片割れを失った千冬を献身的に支えた。それがもたらす結果は？

『ほら一夏、お姉ちゃんが着替えさせてやるからな』

『や、やめてくれよ千冬姉！ それくらい1人で出来るって!!』

結果、病的なまでのブラコンと化してしまった。

これまでもそうであったが、2つの対象に注がれていた愛が残った1つに注がれ、それが驚異的なまでのブラコン化を促したのである。

表では以前の「織斑千冬」を装っているが、1度家に帰ると態度は急変。弟に完全依存したダメ姉へと変貌してしまう。

話は変わるが、復帰後の彼女はドイツ軍への義理を果たすため、教官として赴任する事になったのだが……。

『一夏、お姉ちゃんと海外旅行へ行こう！』

そう言い、無理矢理一夏を大きめのボストンバッグに詰め込み、ドイツへと旅立ったのは後の『織斑千冬伝説』の冒頭で語られる逸話である。

……なお、一夏はそれなりに整った顔立ちをしている（いわゆるイケメン）ため、ドイツでも彼に近づこうとする女性軍人達を血祭りに上げ、「織斑千冬^{ブリュンヒルデ}、未だ顕在」という情報が世を駆け巡った。

最初は一夏も「千冬姉も千春がいなくなつて寂しいんだろうな」と微妙にズレた考えをしていたのだが、エスカレートしていく姉の行動に寒気を覚え始め、友人Dに相談し、ようやく姉がどれだけ危険な状態にあるのかを認識した。

このままではマズイ。

この上なくマズイ。

一夏自身、シスコンではあるが、さすがに実の姉とそこまでいたす気は無い。

真剣に考えた一夏は、独り立ちする事を決意。そのため、就職率のいい藍越学園への入学を決めたのだ。

……だが、しかし！

「……………どうして、こうなった」

入試後、1人自宅で頭を抱える一夏。

何故か藍越学園ではなくIS学園の入試会場へ迷い込んでしまい、何故かそこに置かれていた試験用のISを起動させてしまい、何故か事も在るうに試験官を倒してしまったのだ。

当然、女性しか動かせないISを動かせた男性として、一夏は世界中から注目を浴びる結果になってしまい、今のようにマトモに外を出歩けなくなってしまった。

「……………」

ふと、仏壇に置かれた写真が目に入る。

うつすらと微笑みを浮かべた、双子の姉の写真だ。

「……………そうだな、後悔してたり、くよくよしてちゃダメだよな」

大切なのは、これからどうするか。

この先どうなるか分からないが、それでも自分を信じて進む。

それが姉の墓前に誓った事だった。

ネタから出た誠：織斑千春 in 幻想郷（後書き）

織斑一夏

千春が死んだ事に自責の念を感じ、「強くなる」事に囚われていたが、鈴と弾に諭される。

その後、弱っていた千冬を献身的に支えるが、それが結果的に彼女の強度のブラコン化を招く事となってしまう。

学校では帰宅部ではなく、剣道部に所属。鍛錬も続けていたため、剣の技量は高い。

重度のブラコンと化した千冬から逃れるため、一刻も早く独り立ちしようと就職率のいい藍越学園への入学を決意。しかし、何の因果かIS学園の入試会場に迷い込み、ISを起動させてしまうという原作通りの展開となってしまう。

風峰千春

人間であつた頃の名は「織斑」。

一夏を庇って銃弾に倒れるが、その魂だけが妖怪として転生を果たす。これは閻魔である映姫から見ても珍しいケースらしい。

赤ん坊からのリスタートとなり、幽々子を通じて陸斗へと託される。なお、人間であつた頃と妖怪として転生した時間の軸が少し狂っているらしいが……？

織斑千冬

妹・千春を守れなかった事に自責の念を覚え、衰弱。日に日に弱っていく状態だったが、一夏が献身的に支えた事によって立ち直る。しかし、その代償として一夏に強く依存したブラコンと化してしまう。

表では敢然たる「織斑千冬」として振る舞うが、他人の目の無い自宅などでは一夏に完全に依存した状態と化す。なお、その度合いはエスカレートしており、ネグリジェ姿でベッドに潜り込むわ、風呂場に乱入するわ…… e t c

なお、一夏が彼女以外の女性と何かしらの問題を起こしているのを見つけた時、すぐにその場から立ち去ることを推奨する。その場に残るのは自己責任だが、間違いなく血を見る事になるだろうから……。

鳳鈴音

千春の死に強い衝撃を受けた1人。千春にとって親友とも呼べる間柄だった。

一夏を想っているが、彼が未だに千春の死に引きずられている事を知っているため、積極的にアプローチする事が出来ずにいる。

【幻想サイド】

風峰陸斗

“空に坐す者”。虚無を司る程度の力を持つ。

幻想郷一の女誑しであり、女性からはこの上なく熱い想いを、男性からは嫉妬混じりの視線を向けられている。

妖怪へと転生した千春を引き取るのだが………？

永江衣玖

“美しき緋の衣”。空気を読む程度の力を持つ。

陸斗の妻であり、半世紀以上連れ添っている。異常なほどモテる夫にやきもきしている。

千春を引き取る事に関しては反対ではないようだが…………。

八雲紫

“神隠しの主犯”。境界を操る程度の力を持つ。

陸斗とは古い付き合いで、一説によると彼が生まれて間もない頃から側にいたらしい。

妖怪へと転生した千春を冥界の閻魔から預かり、陸斗へと託す。

西行寺幽々子

“幽冥楼閣の亡霊少女”。死を操る程度の力を持つ。

元は人間だったが、死して亡霊となった過去を持つ。紫とは生前からの友人だが、彼女には亡霊となつてからの記憶しかない。

つかみ所が無く、周囲の者がよく振り回される。大食い。

魂魄妖夢

“半人半霊の庭師”。剣術を操る程度の力を持つ。

代々、幽々子に伝える庭師の者で、祖父から二振りの刀と庭師の任を受け継いだ。

半霊なのに幽霊が怖い。さらに生真面目なため、幽々子によく弄られる。今回の第2次隠し子騒動でも、陸斗が幽々子に手を出したと本気で考えていた。

アリス・マーガトロイド

“七色の魔法使い”。魔法を使う程度の力を持つ。

魔界神の娘で、高いポテンシャルを秘めた人間として生まれ、魔法使いとなった経歴の持ち主。

実は陸斗の娘であり、自分がどの様に生まれたか知っているだけに複雑な感情を抱いているらしいが、それでも父親として陸斗を慕っている。友達が少ない。

神綺

“魔界神”。魔界を創り、魔界に住まう者達を生み出した存在。娘のアリスを溺愛しており、彼女の過剰なまでの愛情に耐えられなくなり、「鬱陶しい」とアリスが魔界を旅立ったのは有名な話である。

なお、アリスだけは唯一、神綺と陸斗の間に生まれたため、正確には魔界人のカテゴリーからは除外される。

四季映姫Ⅱヤマザナドゥ

“楽園の最高裁判官”。白黒付ける程度の能力を持つ。

幻想郷区域の冥界を担当する閻魔であり、真面目で説教臭い。紫が苦手としている人物。陸斗でさえ頭が上がりず、彼女の能力でも彼の女性問題には白黒付けることは不可能だと言われている。

何故、幻想郷の外で死んだ千春が彼女の元へと送られ、さらに魂だけの状態から妖怪化し、その上赤ん坊になってしまったのか。部下のサバタージュと併せ、彼女の悩みの種となっている。

B A D E N Dから始まるストーリー【縁切りルート】（前書き）

タイトルの通りです。

前提条件がちょっと異なった事で、こうなっていました。

BAD ENDから始まるストーリー【縁切りルート】

織斑千春は幼い頃から愛を求めていた。

愛したい。愛されたい。

ただひたすらに、愛を求めていた。

しかし、彼女にとって不幸だったのは、彼女が生まれた先が愛とは縁遠い場所だった事だろう。

まず織斑家には父と母と呼ばれる存在は無く、千春が物心ついた頃にはそんな存在は居なかった。

親代わりとも言えるのは年の離れた姉であり、彼女は両親に関しては何も語らない。ただ「お前達の家族は私だけだ」と。

それならば、千冬の愛情が彼女に注がれたかと言つと、そうでもない。

千春には双子の弟がいた。名前は一夏。

何でもそつなくこなす優等生タイプの千春とは違い、一夏はやんちゃで何かと手のかかる少年。

自然と千冬の注意や関心は一夏の方へと向けられ、言い方は悪いが、千春に対する対応がおざなりなものになっていた。

愛されたい。けれど、愛されない。

彼女は家族からの愛を求めた。そのためにより一層の努力を重ねた。だが、彼女のその思いとは裏腹に、千冬の愛は一夏に、一夏の愛は千冬にだけ注がれていた。

中国人の親友は、何度か諦めさせようとも考えた。しかし、

『それでも、好きだから』

そんな千春の言葉に、何も言えずに終わっていた。

だが、彼女ももしかしたら……心のどこかで理解してしまっていたのかもしれない。

どこまで行こうと、何をしようと、自分は愛されないのではないかと。

織斑家において、自分は異分子なのではないかと。

そんな彼女の一途な思いが碎かれる日が訪れてしまう。

第2回モンド・グロッソ。

インフィニット・ストラトスと呼ばれる兵器の世界大会。かつて千冬はその第1回大会でブレード1本を携えて頂点に立った。

千春も一夏も、そんな彼女を誇りに思っていた。

第2回大会も順当に千冬は勝ち進んでいき、ついに決勝へと駒を進めた。

しかし、決勝が行われるその日、千春と一夏は何者かによって誘拐されてしまう。

当然、決勝戦を放棄して、千冬は2人の救出へと向かう。

そしてその日、織斑千春は“壊れた”。

診察室の中、彼女達が向かい合っている。

……片方は明確な怒りをその表情に宿して。

「どうして、斬ったの？」

そう質問しても、千冬は答えない。
それが千春の苛立ちをさらに加速させる事になる。

「あの人は私を助けてくれたんだよ？　なのに、どうして斬ったの」

「……………あの男が、お前を誘拐したと思ったからだ」

「……………そう」

意外にも、千春から返ってきたのはそんな小さな反応だった。
ふと、視線を上げた千冬の目と千春の目が合い、息を呑んだ。
千春が目に宿していたのは、失望という名の感情だった。

「いつもそう。お姉ちゃんは私の事なんて見てない。私の言葉なんて聞いていない」

いつも、一夏の事ばかり優先してる。

「違う！　私は」

「ならどうして、やめてって言ったのに聞いてくれなかったのッ！
！」

反論、出来ない。

黙り込む千冬を目の当たりにして、千春の怒りは既に針を振り切っている。

明確なる失望。振り切った怒り。もう、姉妹としての仲は破綻してしまっている。

「……………出てって」

「ち、ちは」

「出てって！ もう私の前に現れないで！！ 出てってよ！！」

……………あれから3年。
わたしが『織斑』の名前を捨てて、3年が経った。

「初めまして皆さん。風峰千春と言います」

クラス全体を見渡しつつ、にっこり微笑んでそう言葉を紡ぐ。
何事もまず、第一印象が大切。……………それを考えすぎて、隣のバカは失敗したわけだけでも。

「単刀直入に言わせてもらうと、私は最強になるためにここへ来ました」

ざわ、と戸惑いが広がる。

これまで頭を抱えていた一夏も、私を信じられない目で見ている。
ゆっくりと、視線を教壇に立つ織斑先生へと向ける。彼女はただ真っ直ぐに、私を見据えている（隣の山田先生は目茶苦茶動揺してるけど）。

……………いい度胸してる。自分の罪からもう逃げない、とでも言いたいの？ ま、どうでもいいんだけど。

「だから皆さん、せいぜい私の踏み台になってくださいね？」

せかいさいきょう
織斑千冬を見据えて、そう言い放った。

これは宣戦布告。私は私のためだけに、最強を目指す。

「……………風峰、1つ質問させてもらう」

「はい？」

厳しい顔のまま、私に向かって問いかける織斑先生。
うーん、どうやら本当に私と向き合うつもりみたい。……今更だ
けど。

「お前は何故、最強を目指す」

ああ、そっち系の質問か。

私の言葉を、もしかして「復讐」とかそーゆー意味で受け取ってた
り？ それだったらかなりウケる、どこまで自意識過剰なんだと。

「まあ、ぶっちゃけるとですけど、私あんまり過去に拘らないタイ
プなんです。多分」

その言葉に過剰に反応したのは一夏だった。

ま、3年前に喧嘩別れしてたわけだし、その事も含めて「どうでも
いい」とでも聞こえたんでしょ。

目の前の織斑先生も今の言葉は見過ごせないのか、より厳しい目で
私を見ている。

「色々あって何がしたいのかなって考えていて、紆余曲折の末に
それに思い至ったって事ですな」

ほら、志々雄真実だって言ってるでしょ。この世に生まれたからには、天下の1つでも狙ってゝって。
私は女だけど、頂点目指して突っ走るのも悪くないかなって思ったわけだね、これが。

「そう言うわけだから、織斑先生も世界の頂点を目指すカワイイ教え子のため、せいぜい踏み台になってやってください」

私の発言に、クラス全体が凍り付いた。

そう言われた当人の隣に立つ山田先生なんて、もう血の気が引いて青白い顔になってる。

だってこれ、織斑千冬に対して喧嘩売ってるような台詞だし。

「……………いい度胸だな」

「その言葉、そっくりそのままお返しします」

今更向き合おうなんて、本当にいい度胸してますね？
言葉にせずとも、それは伝わっている。

しばらくの間、そんな一触即発の空気が流れた。それに当てられたクラスメイトは気の毒としか言い様がない。

「……………覚悟しておけ。ここはそんなに甘くないぞ」

「織斑先生、風峰さんと知り合いなんですか？」

放課後、誰もいない教室で山田君がそう尋ねてきた。
誰かがいる場所では話せない内容なのだと、こういった場所で尋ねてきてくれたのだろう。

「何故、そう思う？」

「だってさっきの織斑先生、明らかにおかしかったですし、それに風峰さんも何て言うか……織斑先生個人の事を分かった上で発言してるようでしたから」

……やはり、分かる者には分かるか。

「……あれの昔の名は『織斑千春』という」

「へへ、織斑先生と同じ名字ですね……え？」

ぎぎぎ、と錆び付いたように首をこちらへと向ける。
ああ、恐らく考えている通りの事だ。

「織斑の双子の姉。……私とも姉妹という間柄に当たる」

「え、ええっ！？ でも、どうしてそんな……それに、名字だつて違いますよね！？」

「3年前に他の家に養子に行った。縁も切られているし、戸籍上では赤の他人だ」

あの日、完膚無きまでに千春から拒絶された私は、ただひたすら恐れた。

千春と向き合う度に、自分の罪を突きつけられるのではないかと恐れ、ドイツ軍から教官として就任要請が来た時、幸いとばかりにドイツへと旅立った。

……だが、それは所詮「逃げ」でしか無かった。
1年後、帰国した私を待っていたのは、千春が他の家に養子として入り、織斑の家から出て行ったという現実だった。

「すれ違って、あれから向き合う事を恐れて逃げた」

何度が連絡してみようかと思ったが……何を言われるのか怖くて、それすらも出来なかった。

千春がIS学園に入学すると聞いて、最後のチャンスだと思った。ずっと逃げ続けて来た私が、千春と向き合う事の出来る最後のチャンス。

「…………でも、織斑先生。さっきの…………」

「ああ。みつともなく縋り付こうとして、その結果があのだ」

視線を落とす山田君に、自嘲めいた笑みを浮かべる。

『その言葉、そっくりそのままお返しします《今更向き合おうなんて、本当にいい度胸してますね？》』

あの言葉を聞いても分かる。

私はもう、姉として向き合う事は出来ない。

だからせめて、教師として千春と向き合って行きたい。

…………それが今の私に出来る、罪との付き合い方だ。

「織斑千冬がうざったくて仕方ないんですけど」

「……………どんな風に？」

整備室にて、カチャカチャやってる親友の隣でそう愚痴る。
青い髪にどことなく小動物系な雰囲気なラブリーな我が親友。その
名は更識簪。私が認める数少ない相手でもある。

「分かりやすく例えると、やたらめったら妹分を補給しようとスキンシップを試みる楯無さんくらい」

「それは……………ウザい」

あれを思い出したのか、渋い顔になる簪ちゃん。
半年ほど前の「お姉ちゃんなんて大嫌い！」発言以来、なんていう

か微妙だった姉妹仲が113度ほど方向転換して、かなりおかしい方向へと向かってる気がする。

ぶっちゃけると、楯無さんが暴走してる。それはもう、シスコンを公言するほどに（入学式の会長挨拶で、締めくくりに簪ちゃん個人への愛を語った際、簪ちゃんの華麗なドロップキックが炸裂し、虚さんによって引つ張っていかれた）。

……まあ、あっちの方が数段マシなのかもしれないけども。

「でも嫌いじゃないんでしょ？ あの人の事」

「……まあ、それでも……お姉ちゃんだし」

誤解のないように言っておくけど、この2人の姉妹仲は悪いわけじゃない。

これまでは、簪から楯無さんに対する劣等感、楯無さんから簪に対する遠慮などで、2人ともどこことなくこちない状態にあった。

……それがあの発言で元から拗れた状態が、さらに拗れに拗れて、結果オーライな事になったので、まあいい事にしておこう。

「私みたいに完全破綻しなくて良かったじゃん」

その言葉にハッとなって私を見る簪ちゃん。

私はさー、もう元に戻らない………ていうか、元に戻る必要が無いって分かってる。私は元々、織斑家にとって異分子だったんだって。3年前のあれこれはきっかけに過ぎなくて、織斑家を出て、やっと収まるべき鞘が収まったんじゃないかな。

「……………千春は」

「うん？」

「織斑先生を、許したの……………」

……………ぶっちゃけるとだけど、まだ怒りやら憎しみやら、そーゆー負の感情って奴はまだ残ってる。

でも、許したか許してないかで言えば、許してる。シャーリーだって言ってたじゃん。「許せない事なんて無い。それは許さないだけ」って。

「とっくに許してるよ、あんなバカ。てゆーか……………」

あれに、許さないだけの価値なんて無いでしょ？

「……………そう」

「失望した？ 友達がそんな最低な人間だって知って」

自分が壊れてしまってるって事は自覚してる。

最初は、織斑千冬も、一夏も、全部壊してやるうって思ってた。でも……………いつからだっけ。なんかどーでも良くなって、風峰家に

引き取られてから、価値観がどんどん方向転換して、それでどうせなら最強目指してみようかって。

ま、それもある意味、復讐なのかもしれないけど。

「今更。それも込みで、千春の事好きだから」

……ん、ありがと。

BAD ENDから始まるストーリー【縁切りルート】（後書き）

と言うわけで、3つめのルート「縁切りルート」のダイジェスト版をお送りしました。

・千春と千冬・一夏との間ですれ違いが生じていた。
・3年前の誘拐事件がきっかけで、家族仲が完全に破綻。千春も“壊れた”。

主な違いはこの辺りですかね。
愛するが故に壊れてしまった。……だからこそ、この物語へと繋がってしまったわけなんです。

風峰千春

本作の主人公。15歳。

昔の名前は「織斑千春」。織斑千冬の妹で、一夏の双子の姉。かつては心優しく、「愛する」事と「愛される」事に至上の喜びを感じていたが、現在の彼女は極めてシニカルで現実主義者。相手を完膚無きまでに叩きのめす事が好きだと公言するほど。

3年前の誘拐事件がきっかけで千冬との姉妹仲が破綻。千冬がドイツへと向かって間もなく、織斑家と縁を切り、風峰家の養子となる。実力は未知数だが、IS学園には最強になるために来たと公言するだけあり、高いものと思われる。

イメージC・V 田中理恵さん

「ローゼンメイデン」シリーズの水銀燈

「機動戦士ガンダムSEED」のラクス・クラインなど

連続転生物語「ゼロの使い魔」編（前書き）

新ネタシリーズ『連続転生物語』です。

転生の順番はリリカルなのは ゼロの使い魔で、前の世界でも色々ありました。

まあ、その辺りはまた今度投稿しますので。

連続転生物語「ゼロの使い魔」編

妹・玲夜……ハルケギニアにおいては、レイヤ・ド・トリステインが前世云々の記憶を取り戻したのは、3歳を迎えて間もない頃だった。

自分の名前、周囲の状況、それら全てを統括した上で出した結論に、思わず頭が痛くなった。

「ハルケギニアって……『ゼロの使い魔』じゃないですか!」

死亡率の高さは、前回の『リリカルなのは』とは桁が違う。

向こうはまだ非殺傷とかがあったので、まだ死亡率はそこまで高くは無かったけど、こっちはガチでヤバイ。

まず、将来的に聖戦やらが発動されて、物凄い死者が出る。

「……………問題は、姉ですか」

ここにはいない双子の姉の事を考える。

既に分かっているかもしれないが、彼女の双子の姉の名はアンリエッタ・ド・トリステイン。原作だと将来、トリステインの女王となる少女だ。

アンリエッタの将来の行動。中盤以降はともかく、序盤はハッキリ言ってマズイ。

親友を戦地に送り込んだり（下手したら国が割れてた）、国よりも男を選んだり、挙げ句の果てには復讐で戦争ふっかけたり。

自分という異分子を孕んだ世界において、それが実際に行われたらどうなるか分からない。

「とりあえず、あの人にはそれとなく気をかけて、王族の務めという奴を教え込む事にしましょう」

それでしっかり女王やってくれば文句は無いのだから。

だが、レイヤにとってそれ以上に気にかかる事があるのが事実だった。

恐らく自分と同じようにこの世界に生まれ変わっているであろう兄・陸斗の存在。

元の世界の名前のままでは無いかもしれないが、それでも同じようにイレギュラーがいるならば気づく。

兄と再会できる日まで頑張ろう。

（あなたが王族だろうが貴族だろうが平民だろうが、絶対探し出し

ますから！！）

が、陸斗の転生先について、想像の遙か右斜め上を行っていた事は誰も知らない。

レイヤの覚醒から13年が経過し、ついにレイヤ達も16歳を迎えていた。

これまでの事を掻い摘んで説明するとだが……………レイヤが恐ろしく苦勞しているとだけ言っておこう。

当初はアンリエッタをそれとなく説得して、王族らしくさせようとしたのだが……………無駄な試みだった。

凄まじくお転婆な彼女は、対抗意識なのかレイヤの言葉を全く聴かず、さらに母親であるマリアンヌも「子供が難しい話をするものじゃないかもしれません」と聴く耳を持たない。

数年は根気よく説得していたのだが、ついに父親……国王が逝去し、マリアンヌが喪に服したままの状態を見て、ついに自分が何とかしないとダメだと判断した。

『ダメだ、この王家。早く何とかしないと………』

そんなレイヤがまず味方に付けたのは、国の中枢を担うマザリーニ枢機卿だ。

原作において、国王が逝去してから喪に服したままのマリアンヌ后妃に代わり、トリステインを支え続けた手腕は本物であり、野心を持たずにただ国のため尽くした忠臣でもある。

が、やはり周囲の貴族達からすれば、ロマリアの次期教皇と目されていた男が、突如トリステインへ鞍替えしたのだから、王位篡奪を目論む「鳥の骨」という認識でしか無く、信頼など、一部の者達を除いて雀の涙ほど無かったのだが。

『マザリーニ卿。この国を守るため、私に力を貸してくれませんか？』

そつ話を持ちかけ、信頼を勝ち得たので、そこまで難しくなかった。

そこからは財政の立て直し、インフラの整備、汚職官僚の肅正……
…とにかく、力を入れた。

汚職官僚の中には有能な人材もいたため、彼らに関しては『（要約）
これまで甘い汁吸ってきたんだから、その分王家に貢献してもらおうか』という『ファイアー・ボールから始まり、ライトニング・クラウドで繋ぎ、カッター・トルネードで締める交渉術』で領かせた。

現在、馬車馬のごとく働かせているので、せめて老後くらいは平穏に暮らさせてやろうかとレイヤも考えている。

「……………やっぱり、この話を受けるのが1番だと思うんですけどね」

長引いている会議の議題は、ゲルマニアから持ちかけられたある話について。

ぶっちゃけると、『アンリエッタ王女と皇帝アルブレヒトとの婚姻』だ。

トリステインやアルビオンなどと比べ、歴史の浅いゲルマニア皇家にとって、始祖ブリミルの血が欲しいのだろう。

現時点において、大分立て直されたとはいえ、ゲルマニアから見ればトリステインは弱小国家。同盟を結ぶ代わりに王女を差し出せ、そう言っているのだ。

「しかし殿下！　ゲルマニアなどの成り上がり風情に！」

「お黙りなさい。……………ヴァリエール公爵、あなたの意見を聞かせてもらえませんか？」

レイヤの言葉に、これまで沈黙を保っていた男性……………現ヴァリエール公爵が口を開く。

貴族達の中では中心人物であり、トリステインにおいても有数の大貴族。それがヴァリエール家であった。

「確かに殿下の仰る通り、我が国とゲルマニアの国力は比べ物になりません。今回の話は破格のものと言えるでしょう」

「でしょうね。もし向こうが私を指名していたら、私が向こうへ行っていたんですが」

その言葉に、貴族達が渋い顔になる。

ゲルマニアがレイヤを指名しなかった理由は唯1つ。乗っ取られるからだ。

沈没寸前だったトリステインを立て直し、圧倒的なカリスマで貴族達を統率し、高い政務能力を発揮するレイヤを取り込んだ場合、トリステインを乗っ取るどころか逆に乗っ取られる危険が高い。

そもそも、トリステインを支えているレイヤが国から出て行く事だ

けは、マザリーニやヴァリエール公爵が何としても防がなければならぬ事であつたが。

だからこそ、政務に携わる事も少ないアンリエッタ王女に狙いを定めたのだらう。

「ですが、その……問題は」

話を引き継いだマザリーニが、言葉を濁す。

彼の言いたい事は分かる。周囲の者達も気の毒そうな顔をしていた。レイヤもとても困つた表情を浮かべて、ため息を吐いた。

「……あのバカ王女。トリステインの花とか言われてるけど、実際は頭の中がお花畑じゃないんですか？」

王女としての言葉遣いでは無いが、全員彼女と同じ考えだったので言葉遣いを咎める者はいなかった。

アンリエッタ王女がトリステインのウェールズ皇太子にお熱なのは、トリステインの高位貴族達の間では有名な話である。

何でも『ラグドリアン湖の園遊会』で水浴びをしているところに遭遇し、それ以来互いに好き合っているとかいけないとか。

「いつそのこと、もう何年も喪に服したままのバカ母でも差し出しますか。年齢的にも釣り合いが取れるでしょうし」

「で、殿下……さすがにそれは」

いきなりぶつちやけ始めたレイヤに、マザリーニを始め、貴族達が冷や汗をかき始める。

最悪の場合、強制的に魔法をかけて嫁がせるというのも有りだ。これは実際に昔、政略結婚などでも使われていた方法であり、現在こそ禁術に指定されているが、最悪使う事も辞さないだろう。

とにかく、今のアンリエッタとマリアンヌの立ち位置というのが、単なるタダ飯喰らいというのは変えようのない事実だ。

嫁ぐなり、政務に携わるなり、仕事の1つでもして欲しい。それがレイヤを始めとする数多くの貴族達の意見だった。

と、そんな時だった。

「会議中申し訳ありませんが、緊急時につき失礼いたしますー！」

慌てた様子で、1人の侍女が会議室へと飛び込んで来た。

彼女はレイヤが内密に雇い入れた密偵の1人だ。主に情報のやり取りを担当している人間のはずだが……。

「何事ですか」

「は、はい。たった今、オールド・オスマン殿より殿下とヴァリエール公爵殿に緊急の連絡が！」

名指しされた両名が思わず顔を見合わせる。

オールド・オスマンはトリステイン魔法学院の長を務める老人で、普段は好々爺のエロジジイだが、熟練したメイジでもある。そんな彼から緊急の連絡……嫌な予感しかない。

侍女が差し出した書簡を、まずはレイヤが手に取り、開く。

……数秒後、レイヤの顔が引き攣るのを見て、周囲の者達の嫌な予感が倍増した。

「あ、あの……殿下？」

「……………どうぞ」

レイヤが顔を引き攣らせたまま差し出した書簡を取り、ヴァリエール公爵も読み進める。

それに書かれていた内容を理解した瞬間、彼の表情が凍り付いた。

「な、なんだとおおおおおおおおおお
お！！！？？？」

ヴァリエール公爵が絶叫するよりも時は遡る。

ここ、トリステイン魔法学院では毎年恒例となっているある儀式が行われていた。
使い魔召喚の儀式。

これは2年生への進級試験も兼ねており、使い魔となる対象を召喚する『サモン・サーヴァント』。そして喚び出した使い魔と契約する『コントラクト・サーヴァント』を行い、契約が成立すれば儀式は終了となる。

禿頭の中年男性が、喚び出される使い魔の種類、そして使い魔のルーンを記録していく中、未だ召喚に成功していない少女のみが残さ

れた。

「おい、ゼロのルイズ！ まだ成功しないのか？」

「諦めた方がいいんじゃないの？ なんてったってゼロなんだから」

嘲笑の声が聞こえる度に、男性が彼らに厳しい視線を投げかける。

が、当の声を向けられる少女は気に留めた様子も見せず、再び杖を挙げる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、“使い魔”を召還せよ」

その瞬間、再び爆発した。

爆発。それが「ゼロ」の二つ名の由来だった。

幼少期より彼女の使う魔法は全て爆発してしまい、決して成功しない。

魔法の成功率がゼロ。故にゼロのルイズ。

（……………また、失敗か）

このままだと進級できず、実家に帰るしかない。

父親や下の姉はともかく、母や上の姉とは壊滅的に仲が悪い（実際は彼女達も愛情を伝えようとしているのだが、幼少期のあれこれですれ違いが続いてしまっている）。そのため、実家に帰っても特にやる事などないのだが。

と、そんな時だった。爆煙の中に影らしきものが見えたのは。

「成功した!？」

「まさか、ゼロのルイズが？」

周囲がざわつく中、1番驚いていたのは当のルイズ本人だった。

今まで1度も成功した事の無かった魔法が成功した……………？

否、成功が失敗かはどんな使い魔を喚び出したかにもよる。わき起こる衝動を抑えつつ、煙が晴れるのを待つ。

煙が晴れたその時、周囲の空気が完全に凍り付いた。

「……………いきなり景色が変わったかと思ったが、ここはどこだ？」

短く切り揃えられた金色の髪。

澄んだ碧い瞳。

顔立ちも十分に美形と呼ばれる部類に入るだろう。

しかし、ただ1点の特徴がこの場を凍て付かせる要因となっていた。それは普通の人間とは違いすぎる、尖った長い耳。それが意味しているのはただ1つ。

「え、エルフ………！！」

東方の砂漠に住まう異種族の名を、誰かが恐れの声で口にする。

強大な魔法力を持ち、聖地を支配している恐るべき種族。人間にとっては畏怖の対象だ。

現れたエルフに対し、禿頭の男性……コルベールが杖を構える。

使い魔召喚の儀式では、召喚したメイジでは御しきれない魔獣が稀に召喚される事もある。そのような非常時に備え、実力のあるメイジが控えている。

『炎蛇』の2つ名を持つトライアングルメイジ、ジャン・コルベールも魔法学院においてはそんな腕利きの1人だった。

「……………」

ただ1人、ルイズは召喚して少しの間、呆然としていたが……………。
すぐにいつもの様子に戻り、そのエルフの方へと歩いて行く。

「ルイズ、よしなさい！」

「ミス・ヴァリエール、殺されるぞ!？」

周囲のそんな声を気に留める事もせず、ルイズはエルフへと歩み寄る。

小柄なルイズが彼を見上げる形で正面から向かい合う。最初に口を開いたのはエルフの方だった。

「なあ、ここはどこだ？」

「トリスティン。あんた達が言う蛮人の国よ」

「……………なるほど。通りで変な奴が多いと思った」

今ここで1番変なのはアンタよ。

そう言ってみようかと思ったけど、それを言ったら卒倒する生徒も

いるんじゃないかと思い、敢えてルイズは口にしなかった。

「で、アンタは私に召喚されたってわけ。どうする？」

「どうするって、どうすりゃいいんだ？」

「私と使い魔の契約を交わせば私の使い魔なんだし、最低限の面倒くらい見てあげられるけど？」

そう言われ、エルフの男は顎に手を当てて考え始めた。

ルイズ以外の者達にしてみれば、それが永遠に近い時間にも感じられた。

そして少しして、短く「うん」と答える。

「ま、行く当ても無いし、どうせ向こうにいたってつまんないし、しばらくこっちにしているとするか」

「……………そう」

彼が了承したのを確認すると、ルイズはちょいちょいと手で膝を突くように指示する。

何かと思いつつも、彼はその場に膝を突く。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そう言い、自分の唇で彼の唇に触れる。

コントラクト・サーヴァント。使い魔契約を施すための呪文だ。

大抵は人間以外の生物が召喚されるため、キスをする事に抵抗はほとんどない。

だが、相手はエルフとは言え、姿形は人間と変わらない。しかも男だ。ルイズも一応一般的に年頃の少女なので、抵抗が皆無だったわけではない。

触れ合う時間はほんの少し。……………が、

「んっ!?!」

ルイズが突如、変な声を上げた。

エルフとコントラクト・サーヴァントなんてして、何かあったんじゃないか。……………が、それは違った。

ディープキス。フレンチキスとも言われるそれは、ルイズの口内を彼の舌が蹂躪していた。

顔を見合わせ、また笑う。

周囲はそれに呆気にとられ、エルフ相手に対等に話すルイズに、どこか畏怖のような感情を覚えていた。

「私はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ご主人様でもルイズでも好きなように呼びなさい」

「じゃあルイズ。これからヨロシク頼む。……………そうそう、俺はリクト」

『ネフテス』のリクトだ。

連続転生物語「ゼロの使い魔」編（後書き）

第2王女（転生者）。スレたルイズ。エルフの使い魔（転生者・ガンダールウ）。

とりあえず、他では滅多に見ない取り合わせでお送りしました。

貴族に転生っていうのはよく見るんですが、エルフに転生するというのはあまり見ないので。

それに、家庭環境からすつかりスレてしまったルイズというのも珍しく無いでしょうか？ カリーヌやエレオノールから散々詰られていたら、普通スレてしまうのではないかと思うのですが。

そんなこんなでそんな要素を詰め込んでみたら、こんな風なお話に仕上がってしまいました。

では、主要人物の紹介です。

リクト

ルイズに召喚されたエルフの少年。

転生者の兄の方で、ネフテスにエルフとして生まれてからは退屈な日々を送っていた。どこか諦観したルイズには親近感を覚えており、彼女の使い魔として過ごす事を決意する。

戦士タイプでは無く、メイジタイプのエルフ。中でも『反射』と『電撃』を得意としている。

対外的に姓が必要な時は『リクト・カザミネ』を名乗る。

レイヤ・ド・トリステイン

トリステイン王国第2王女。アンリエッタの妹姫。

転生者の妹の方で、生き残るべく破滅フラグの立っているトリステインを必死に立て直そうと奔走している。当初はアンリエッタに頑張ってもらおうと思っていたが、あまりにもダメなので見限り、自分で何とかしないとダメだと悟り、自ら変革に乗り出す。

火と風のトライアングルメイズで、体力が無いので長時間戦闘は出来ないが、精神力の使い方が上手らしい。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
本作のヒロインの1人。

幼少期から一切魔法を使う事が出来ず、それを家族（特に母親や上の姉）に詰られて育ったため、どこか諦観した雰囲気纏っており、キュルケの挑発にも「ツエルプストー？ 何それ美味しいの？」と何処吹く風の反応を返している。家族との仲も壊滅的（父と下の姉とは普通に接する）であり、入学してからは滅多にやり取りをしていない。通称「スレルイズ」。

二つ名は原作通り「ゼロ」だが、当人は今更だと思っているため、クラスメイトから貶されても過剰に反応したりしない。

リクトを召喚した事で、彼女の物語がようやく始まる事になる。

連続転生物語「そもそも始まり」編（前書き）

この兄妹がどうして何度も転生しているのか。
その辺り、ハッキリさせておきましょう。

連続転生物語「そもそも始まり」編

「何か言う事は？」

「ごめんなさい」

俺たちのリスタートは、目の前で土下座するバカへの説教からだっ
た。

まあ、これだけじゃ何だか分からないだろうけど、とりあえず流れ
を聞いていればだいたい分かると思うので、ちょっとだけ辛抱して
いてくれ。

「これ何回目だ？ 俺たち、どれだけ転生してるの？」

「えっと…… 8回目、いえ9回目でしたっけ？」

「17回目だ！！ しかもやたら死亡フラグが乱立する世界ばっか
選びやがって！！」

『NARUTO』の時は生きた心地がしなかったぞ！？ あそこ妙
に死亡率高いんだからな。

おまけに、俺がどこに生まれたと思う？ うちは一族だぞ！ イタ
チの一族皆殺しで壊滅が決定してる！

生き抜くためにどれだけ俺が苦勞したと思ってる。火影のじーさんに会いに行つて、イタチをそれとなく説得したりして、俺がどれだけ大変だったと……………！

「兄さんはまだマシです。私なんて水の国……霧隠れの里ですよ？」

こっちの我が妹は、霧隠れの里に転生したとか。

第二部に入ってからにはマシになったようだが、霧隠れと言えば4代目水影のやぐらが写輪眼で操られ、恐怖政治で里を支配していた時期。

下手な行動を取れば即座にサーチ&デストロイな状況下、よく生き残れたなと思つたぞ。

「大変でしたよ……………？ おまけに私、血継限界ですし」

あ、そう言えばそうだったな。

昔の霧隠れと言えば、とにかく血継限界が疎まれていて、最初の方でも出てきた白も父親に母親が殺され、自分も危うく殺されかけるという状況に陥っていたらしい。

うちの妹だが、火遁と土遁を組み合わせで発動する『溶遁』と火遁と水遁を組み合わせで発動する『沸遁』の2種類の血継限界を持っていたため、姉共々小さい頃から相当危ない目に遭ってきたのだと

か。

それでも生き残って、霧の忍刀七人衆に数えられるまでに成長したのは素直に感心するが。

「そう言う兄さんこそ、うちはイタチ以来の麒麟児って呼ばれてたそうじゃないですか」

……まあ、恥ずかしい話ではあるが、実はそうだ。

一応、子供の身体に大人の頭脳なので、文字の読み書きは出来るし、知識を覚えるのも同年代の忍よりも早い。

だから俺としてはふつーにやってただけだが、妙に才能はあったよ
うで、いつの間にか同期一の出世頭になっており、ナルト達がまだ
下忍なのに、俺はもう中忍になっていたりで……とにかく大変だ
った。

「まあ、その辺りは置いておこう。それより、何で俺たちがまたこ
こに来てるんだ？」

目の前で土下座してるバカを見下ろしつつ、そう尋ねる。

コイツは……えっと、誰だっけ？ とにかく名前は忘れたが、俺た
ちが元々いた世界において魂を選定する役目を担ってる、一種の精
霊だ。

そもそもの始まりは、俺たちがその世界で死んで、魂の空きスペースのある世界に転生してくれと言われて転生した事だった。

「懐かしいですね。確かほら『リリカルなのは』の世界でしたっけ？」

懐かしむような口調でそうしみじみと語る玲夜。

その世界がそーゆー世界だと玲夜が気づいてからは楽になったが、それまでは大変だった。

ごく普通の一般家庭に双子の兄妹として生まれ、ごく普通に進学……と行きたかったのだが、小学校に上がった頃から異変は起こり始めた。

同級生の子が喧嘩してるのを目撃し、さすがに放置しておくのは良くないと、それを仲裁。……それが方向性を定める第一歩だった。

その同級生と仲良くなり、家に招いたり招かれたりの関係を築きつつも、玲夜は首をかしげ始めていた。

『あれ？ これって『リリカルなのは』に似てますよね？ でも、当の高町なのはと彼女達が仲良くなってませんし……』

それもそのはず。主人公である高町なのはと彼女達……アリサ・バ

ニングスと月村すずかが友達になるきっかけと言ったのが、俺が仲裁したあの喧嘩だったからだ。

玲夜によると、あれは別に仲裁しなくても高町なのはが間に入って和解する事になっていたらしい。

まあ、過ぎてしまったんだから仕方ないか〜と思っていたんだが……。

「まさか、私たちが主人公の代わりをしなければならなくなるとは……… 思いもしませんでしたから」

……… そう。『リリカルなのは』において、全ての発端となったのはユーノ・スクライアがジュエルシードを追って地球へとやって来たあの出来事。

深手を負った彼がランダム念話で助けを求め、それに高町なのはが応じて、物語の幕が開く……… しかし、俺の余計な行動で本来進むはずだった物語が大幅に狂った。

まず、確かにユーノ・スクライアは高町なのはによって助けられた。動物病院へと連れて行かれた。

彼女も彼の助けに応じ、ジュエルシードを集め始めた。……… 問題はそこからだった。

『なのはに裏切られたんだ』

……そう、高町なのはが暴走を始めた。

どうも仲良し三人娘が生まれなかった影響で、彼女は孤独な学校生活を送っており、家庭でもそれは埋まらず、相当歪んだ価値観を形成する結果となってしまうた。

ジュエルシードが願いを叶える宝石だと知り、何個か集まったところで彼女がユーノを裏切り、数個のジュエルシードを持って逃走。ちようど、その辺りで俺たちがユーノを見つけ、手当てしたんだっ
たっけ？

「ええ。最初は『これ、何があったんですか？』って思いましたし」
幸運なのか不幸なのか分からないが、俺たちにも魔力があった。それも実戦に耐えられるだけのものが。

さすがに放っておくわけにはいかず、高町なのはを探しつつもジュエルシードを回収。フェイト・テストロッサとの遭遇もその頃で、玲夜が原作知識を応用した罠を使い、捕縛にも成功した。

その後はやってきた管理局に事情を説明。持ってたジュエルシードとフェイトを渡し、高町なのはの事も話して、それで一件落着……。

……まあ、色々と狂っていたので、A・sとかStSが恐ろしく手間のかかる展開になったのだが……それはまた別の機会に説明

しよつ。

「じ、実はですね……………また、問題が出てきまして」

「……………また、ですか？」

コイツの言う問題。

それは俺たちと同様の形で死亡した人間が、転生先の世界を思うがままに改変し、他の魂にも影響を与えてしまう問題の事だ。

その辺で言えば俺たちも同じような事をしてたわけだが、コイツ曰く「意図的かそうでないかで分かれるので、その判断だとあなた達はずっとマシ」らしい。

『終わりよければすべてよし』のように、紆余曲折の末に事態が収束するならともかく、最悪的な終わり方だと問題がありすぎる。そのため、俺たちがその厄介な連中を排除+物語を修正するために動かざるを得なくなる。

コイツからその役目を押しつけられたのは4度目の転生の時。転生先は……………確か『ドラクエ5』だったか？

「ええ、ドラクエでも名作中の名作。兄さんだっぺ一緒にやりましたよね？」

「……………まあ、それで助かったんだが」

その厄介な連中は、在ろう事に主人公の嫁になる女性を惚れさせ、物語を大きく歪めてしまった。

ドラクエ5は物語の中盤で、主人公が結婚相手を選び、結婚する。そしてその間に双子の子供が生まれるわけだが………実はその子供が天空の勇者で、妻が勇者の子孫だったという事が判明する。

ゲームではそこまで重要じゃないかもしれないが、実際に世界では勇者が生まれないと大問題となる。

あの連中は「自分の子供が勇者なんだし大丈夫だろ」と思っていたが、実際に生まれてきたのは勇者でもなんでもなく、才能のある普通の子供。

「すっかり忘れてましたからね。勇者が生まれるには、『勇者の血統』と『エルヘブンの民の血統』が必要だって事に」

主人公はエルヘブンという街の血を引いている。それがヒロインの『勇者の血統』と組み合って、初めて天空の勇者が生まれてきたというわけだ。

これには非常に困った。

マズイ。どうすればいい？

いくら何でもヒロイン3人を無理矢理……というのは無理だ。そう

いう術は無いし、人道的に見ても間違いだし。

仕方なく全世界を行脚して、他の勇者の子孫を捜すハメになったのは言うまでもない。これもまた、恐ろしく手間のかかる展開になったただけ言っておこう。

「で？ 今度はどんな世界なんだ？」

「あ、いえ、これはこれでいい意味の問題なんですけど……何と言いますか」

もじもじと俯く精霊。

見かけはカワイイので、こういう仕草は萌える。

「先に言っておくと、『サクラ大戦』の世界です」

「サクラ大戦ですか……………」

玲夜が懐かしそうにうんうんと頷く。

俺的には世代が微妙に違ったので、やった事は無い。だが、玲夜は昔っから色々とゲームをやり込んでいるので知識があるのだろう。

……………それが何百年前の知識なのかは知らないが。

「その、ですね。転生したのは『不幸な展開なんて認めないぜ！』
っていう人だったんです」

……………もう展開が読めた。

実は『俺TUEEEEE』っていうのよりも、そういった奴が1
番厄介だったりする。

例えばだが、『リリカルなのは』だとプレシア・テストロッサが娘
を亡くす展開が気に入らなくて、それをチート能力を使って回避し、
家族幸せに暮らしましたとさ〜という流れになってしまう。

それはそれでハッピーエンドじゃないか？ いや、とんでもない。

もしもそうなってしまえば、プレシアがアリシアを蘇らそうと、主
要人物であるフェイト・テストロッサを生み出さなくなる。フェイ
トがいない以上、ジュエルシードを集めに行かないし、高町なのは
とは友達にはならず、管理局にだって入らない。

1つの要因が狂う事で、物語全体に大きな影響が出てしまうのだ。

なお何でこんなに詳しいのかについてだが、4回目の転生……2週
目の『リリカルなのは』の世界がまさにそうだったからだ。おかげ
で今度は敵役に回るハメになった。

「で、そいつ何したんだ？」

「いくつか物語が始まる前に介入したんです。具体的に言うと戦争

とか革命とか」

「……………嫌な予感倍增ですね」

「歴史的にそこまで大きな変化は無かったんですが、花組の一員になるマリア・タチバナの過去が大きく変化して、花組入りしなくなりました」

ぶはっ、と玲夜が噴いた。

よく分からないが、また主要人物が物語に登場しなくなったのだろう。

「分かりやすく説明するとですね、マリア・タチバナはロシア革命時代、慕っていた隊長を亡くしているんです。恐らく過去を変化させたとなると」

「ええ。隊長の死を防ぎました。それでそのままロシアに留まり、彼女は幸せな家庭を築いています」

それはそれで良かったのかもしれないが、大筋の物語から見れば非常に困った事になったらしい。

「彼女は大神一郎が来るまで、花組において纏め役でしたから……
…彼女がいなくなったとなると、かなりマズイですね」

『花組』とか『大神一郎』とかゆー単語は分からないが、とにかくマズイ事になったのは分かった。

それで、どうすればいいんだ？

「まず、玲夜さん。あなたは彼女の代わりに花組に入ってもらいます。ただ、今回もかなり特殊ですのでいくつか特典を譲渡する代わりに、重要な原作知識は封印します。いいですね？」

「はい」

「陸斗さんも、特典譲渡の代わりに知識をほとんど封印。あなたも物語に関わるようこちらで設定した上で転生させますので」

「分かった」

さて、果たしてどんな物語になるのやら。

さて皆さん、初めまして。レイヤ・フォーエンブルグです。

簡単に自己紹介させていただくと、イギリス出身の18歳の女の子
……そこ、行き遅れとか言わない。

昔から不思議な力があって、それが縁で藤枝あやめと名乗る女性の
スカウトを受け、こうしてはるばる日本へとやって来ました。

「……………ここまでは問題無し、ですね」

船の中、あやめさんから渡された書類を眺めつつ、そう呟く。

そこには帝国華撃団・花組の概要が書かれている。それに現時点で
のメンバーも。

神崎重工のご令嬢、神崎すみれ

桐島流琉球空手継承者、桐島カンナ

そして私、欧州大戦にも参戦経験のある元軍人、レイヤ・フォーエ
ンブルグ

後に霊力が高い女性が中心に集められる事となるのだろう。

「問題はこの先」

先に転生し、歴史を変えた転生者。

よくも厄介な事にくれたなと私が撃ち殺してやろうと思ったんですが、どうやら既に死んでしまったようです。

それはともかくとして、彼がいたという事がこの先、歴史にどんな影響を与えていくかが分からない。

私同様にこの時代へと転生している兄さんの事もありますし……………。

「……………まあ、焦らず行く事にしましょう」

時は太正10年。太正桜に浪漫の嵐が吹き荒れるのは、まだ少し先の話……………。

連続転生物語「そもそも始まり」編（後書き）

と言うわけで、あんまりこっちでは見ない「サクラ大戦」へ介入します。

本編は書きませんよ？ どうせ、基本的に原作と変わらないように玲夜も動くでしょうから。

連続転生物語「リリカルなのは」編

主人公は風峰陸斗・玲夜兄妹。

この2人は転生者。現世で寿命を待たずに死んでしまい、その場合の救済措置として魂の空きスペースのある世界へと転生させられる事に。

その場合の特典として、玲夜の言った「生まれ変わっても兄妹で」、陸斗の「生まれ変わっても記憶を保持」という願いのまま、2人は転生を果たす。

2人が生まれたのは、ごく普通の一般家庭。

一流商社に勤務する父親と専業主婦の母親。親戚はおらず、家族4人仲良く暮らしている。

2人の運命を大きく揺るがしたのは、小学校に入学してから。

小学校の名前は『私立聖祥大附属小学校』。この名前に玲夜は「あ

れ？」と違和感を覚える。

だが、この時は違和感を覚えるだけで、それについて特に疑問を口にする事はなかった。

入学式を迎えたその日。陸斗は裏庭で喧嘩している女の子に出会う。喧嘩の原因はどうか金髪の子が紫髪の子のカチューシャを取り上げてしまった事らしい。

たまたま遭遇してしまったとはいえ、さすがに見て見ぬ振りは出来ない。

陸斗は2人の間に入り、お説教。子供とは思えない（実際、精神年齢は三十路近い）大人びた様子の陸斗に戸惑いつつも、2人は和解する。

そんな時、「兄さんどこ行っただしょう」と捜し回っていた玲夜が、陸斗が裏庭にいるのを察知し、近づこうとする。と、その途中で誰かとすれ違い、再び違和感が。

「はてな、何だか妙な感じが……………」

疑問が少しずつ大きくなるけども、やっぱり玲夜は思い出せない。

裏庭にいた陸斗を見つけるも、近くにいた女の子を見て、ようやく疑問が解決する。

「あ、これって『リリカルなのは』に似てますよね」

『魔法少女リリカルなのは』。

前世からアニメや漫画、ゲームが大好きだった玲夜は、ようやく思
い出す。

思えば、さつきすれ違ったのは主人公の高町なのはでは無かっただ
ろうか？ それに今、兄と話しているのはその親友、アリサ・バニ
ングスと月村すずかだし。

事態を飲み込めた玲夜だが、ここで新たな疑問が浮かび上がる。

本来、アリサとすずかの2名を仲介するのはなのはでは無かっただ
ろうか？

ここで友達になるはずだったが、それを兄が肩代わりする形になっ
たけども……………大丈夫だろうか？

どちらにせよ、ここが『リリカルなのは』の世界だと決まったわけ
じゃない。

魔法なんて本当にあるか分からないだし、ただ単に同じ名前や顔
の人間がいるだけかもしれない。

そう思い、深く考えないようにした。

……………もしもこの時、この事についてもっと深く考えていたら、今

後の展開はまた違った形になったかもしれないが……………。

風峰兄妹がアリサ・バニングスや月村すずかと親交を築くようになって、1年が過ぎた。

その間、2人は様々な事件や騒動に巻き込まれる事となる。

まず陸斗の方だが、月村家……夜の一族のお家騒動に巻き込まれた。これはすずかの親戚に当たる月村安次郎という男性が、月村家の財産を狙い、すずかの姉、忍やすずか達に執拗な嫌がらせを繰り返すというものだった。

月村邸に遊びに行った際、その嫌がらせに巻き込まれた陸斗は脅迫めいた言葉を投げかけていた安次郎に攻撃（股間を蹴り上げるという恐ろしいもの）。

「警察沙汰にされたら困るのはそっちじゃないんですか？」

“夜の一族”でも何でも無い陸斗が巻き込まれたら、当然警察沙汰になる。

そうなれば、叩かれるのは脅迫を行っていた安次郎だ。

その後、安次郎はノエルやファリンの後続機に当たる自動人形「イレイン」を用いて、襲撃をかける。

が、待ち構えていた陸斗達によって取り押さえられ、イレインも起動される前に確保され、事態はようやく終息へと向かう。

一方、玲夜だが……こっちはこっちで陸斗とは違った意味での厄介事に巻き込まれていた。

学校帰り、公園に寄り道した際にお腹をすかせていた1匹の子狐に遭遇する。

たまたま買ったたい焼きを物欲しそうな目で見ていたので、半分分けてあげる事に。

それで懐かれたのか、学校帰りや休みの日、よくその子狐に遭遇す

る。

ある日、その子狐と一緒にいると、飼い主と思われる巫女服の女性と出会う。彼女は神咲那美、子狐は久遠と言うらしい。

玲夜はどことなく、那美や久遠が普通とはどことなく違う事を感じており、何か隠している様子を察知していた。

さらに数日後、久遠と一緒にいると、那美の親族を名乗る女性と出会う。神咲薫と名乗ったその女性は、久遠をどこか不思議な目で見ている事に玲夜は気づく。

何か良からぬ気配を感じた玲夜は、それから久遠や那美達の事をより注意深く観察するようになる。

そして、運命の日がやってくる。

久遠を探して神社を訪れた玲夜の目に飛び込んだのは、少女相手に斬り掛かるうとする薫の姿だった。

当然、その少女と薫の間に割って入る玲夜。そこで………ようやく思い出した。この展開を、自分が知っている事を。

久遠は祟り狐（妖狐）で、今は封印されているが、いずれ封印が解けてしまい、再封印が必要になる事。

封印の際に、神咲の人間（那美の両親や祖母）を死に追いやり、薫の先代に当たる女性も現役引退にまで追い込まれた事。

薫は再封印の自信が無く、封が解けて暴走する前に久遠を殺そうとした事。

事情を聞かされた玲夜は当然それに反対し、久遠を殺さずに再封印すべきだと主張する。しかし、いずれまた久遠が暴走し、多くの被害を出すという薫は封印が解ける前に久遠を殺すべきだと刀を振るう。

そうしている中、久遠の封印が解けてしまい、膨大な力が暴走するという最悪の結果を迎えてしまう。

理性は失われ、狂気に吞み込まれたまま暴走する久遠。

そこへ駆けつけた那美と共に、説得を繰り返す玲夜。

幾度となく久遠を鎮めようとし、ついに久遠から祟りのみを分離させ、見事討ち滅ぼす事に成功する。

それらの騒動を終えてから、2人は改めて相談し合う。

この世界は本当に『リリカルなのは』の世界かもしれない、と。

だが、こつちでは高町なのははアリサやすずかと交友を築いていない（これに関しては陸斗に責任があるのだが）。

もしも本当に魔法が存在するのなら、今後の事態にも大きく影響してくるのでは無いだろうか。

「とにかく、本当にそのアニメの通りになるのなら、十分注意して行動すべきだろ？ 超能力や退魔師なんている世界なんだし、魔法があっても不思議じゃない」

「……………そう、ですね」

そしてさらに1年、小学3年の時を迎える事となる。

ある日の夜、助けを求める声が聞こえ、「あ、やっぱりこれリリカルなのはだ」思ったのは言うまでもない。

ちゃんと高町なのはが助けに行ったのか不安だったけども、さすがに夜抜け出す事は出来ないで、そのまま放置した。

……………翌日、動物病院が半壊しているのを見て、どうやら原作通りに行ったのだと玲夜は安心した。

その後、特に周囲に異変らしい異変……………大樹の暴走はあったけど

も…………は起こらぬまま進んでいったのだが…………。

「た、助けて……………」

「……………」

帰り道、ズタボロになったイタチが助けを求めているのを見て、思わず顔を見合わせた。

どうする？

どうしましょう。

見て見ぬ振りが出来るほど、動物虐待精神が育っていなかったため、やむを得ずに2人は家に連れ帰り、イタチの手当てをした。

「なのはに裏切られたんだ」

手当ての最中、それを聞いてぶっ飛んだ。

何でも、最初は普通にジュエルシードを集めていたのだが、金髪の少女と戦ってから様子がおかしくなり、ユーノにある質問をし出した。

曰く「ジュエルシードは願いを叶えてくれるんだよね？」と。

ユーノは考古学者であり、科学者ではない。そのため、ジュエルシードが宿した正確な能力は分からないが、伝承では「願いを叶える宝石」と言われている事を教えた。

……そしてその後、高町なのははユーノ・スクライアを攻撃。彼が保有していたジュエルシードを全て奪い取り、姿を消した。

「……………どうなってるんだ？」

「分かりません。もしかして、私達の干渉が予想以上に物語へ影響を与えているのかもしれない……………」

そもそも高町なのはについての情報が少ないと考え、彼女について調べ始めた。

まず分かったのが、彼女は友達が異常に少ない……………というよりも、皆無である事。

思い出してみると、クラスでもほとんど1人でいたような気がする。決して家庭環境は悪いものではなかったが、玲夜はふと原作を思い出してみても、首をかしげた。

幼少期、高町士郎が入院していた際、高町なのはは独りぼっちだった。母は喫茶店を切り盛りし、兄や姉はそれを支えており、幼い彼女に構う者は誰一人いなかった。

よく二次小説でも、孤独な幼少期を過ごしたために「いい子」でいる事に執着するようになったと描かれていたが、もしもそうだとしたら？ さらに小学校でも孤独な生活を送っていたために、それがさらに影響しているとしたら？

そもそもだが……子供が夜中に家を抜け出して、そのまま家で帰っているのを待っていたりするだろうか？

そこまで考えて、玲夜はようやくかなりマズイ状況にあったんじゃないかと思う。

ジュエルシードを放置しておく、暴走して次元震が起きて、「世

界終了のお知らせ」になりかねない。

そんな風に二度目の人生を終わらせたくないの、ユーノに協力し、ジュエルシードを探す事に。

この場合、幸いだったのは2人に実戦に耐えうるだけの魔力があった事。

ユーノの指導を受けつつ、初歩的な魔法を覚え、空いた時間を使って探索に専念した。

そしてある日、ジュエルシードを回収する中、襲撃者が現れる。……それはオレンジ色の体毛の大型犬を携えた、フェイト・テストロツサと高町なのはだった。

「嫌な予感的中ですね」

高町なのはがジュエルシードを持って姿を消したと聞いて、こうなる可能性を考えていた。

原作ではフェイトがなのはに依存しているような感じがあったが、この場合は逆だ。

ジュエルシードを対価に、フェイトを手伝う事を決め、こうして行動を共にしていた……そう考える方が妥当だろう。

この時のなのはとフェイトの魔導師ランクは、だいたいAAA。

陸斗と玲夜のランクは、せいぜいBかAどまり。ユーノを入れたとしても、相手にならない。

だが…………。

「…………まさか、ここまで簡単に引つかかるとは」

呆れる陸斗の前には、バインドで雁字搦めにされ、気絶した2人と1匹の姿があった。

陸斗と玲夜のアドバンテージは、精神年齢が高い事。それだけだ。

飛行しても高速型のフェイトに追いつかれる。ならば、飛行できない場所を戦闘区域に選んだ。…………林である。

神社の雑木林に逃げ込み、高速飛行が出来ないようにし、追ってくるであろうルートを考え、バインドを仕掛ける。それに失敗した場合も想定し、久遠（戦闘力高し）にスタンバってもらっていたが。

とりあえず、気絶した2人からデバイスを没収。ユーノの協力の下、慣れない封印魔法で魔力も封印し、なのはに関しては高町家に引き渡した。

まあ、引き渡したと言っても、警察経由でだ。…………彼女は家出した事になっていたため、家族から搜索願が出されていた。そのため、気絶していたのを見つけた、という設定で警察署まで連れて行き、引き渡した。

フェイトとアルフについては、バインドをかけた状態で監禁（言い方は悪いが、事実その通りだし）。監禁場所は彼女達が拠点に使用していたマンション。さすがにずっと拘束したままでは死んでしまうため、ユーノに監視をお願いし、バインドを解除して食事させたりしていたが。

そしてそれから数日後。ようやく管理局が来訪した。

「遅くなつてすまない。事情を説明してくれないか？」

クロノ執務官はまあまあ話の分かる相手だったので、安心した。

これまでの経緯を説明し、フェイトとアルフを引き渡し、さらにレイジングハートとバルディッシュ、及び保有していたジュエルシードを全て提出。ようやくお役ご免となった。

その後、事件が片付いてから、改めてクロノ執務官とリンディ提督が自宅を訪れた。

事件の黒幕であるプレシア・テストロッサは死亡。正確には虚数空間にアリシア・テストロッサの遺骸と共に落ちたまま、行方知れずとなったらしい。

フェイト・テストロッサは使い魔のアルフ共々、裁判にかけられる事になった。もちろん、プレシアの命令……それも虐待を受け、命令に従う他無かった事も考慮され、そこまで重い罪にはならないとの事。

そして、高町なのはについてだが……。

「……………少なくとも、完全無罪というわけにはいかないでしょうね」

真剣な顔でそう告げるリンディ提督。クロノ執務官も同じような表情を浮かべている。

高町家に戻った後、リンディ提督から事情を説明した上で、彼女も重要参考人として事情聴取を受けた。

この場合、問題になったのは『ユーノ・スクライアを攻撃して、ジュエルシードと彼が保有していたデバイスを奪い、逃走した』事。

ユーノへの魔法攻撃は傷害罪。ユーザー認証されていたとはいえ、レイジングハートの保有権はユーノにある。ここで窃盗罪が成立してしまう。さらにジュエルシードはロストロギア。ここでもロストロギアの窃盗罪（かなり重いらしい）も成立する。

「一応、ユーノ君は彼女を訴えるつもりは無いのだけど……」

元はと言えば、自分が巻き込んだのだからとユーノも責任を感じているらしい。

だから、自分に対する傷害罪や窃盗罪について、訴える気は無いと主張している。

だが、問題なのはロストロギア窃盗罪。そしてフェイト・テストロツサへの協力。

フェイトへの協力は彼女自身の意志であり、誰かに強制されたわけでは無い。おまけにそれが犯罪である事を知った上での行動だ。

……そのため、彼女もミッドチルダで裁判を受けなければならないとなった。

もちろん、特殊な状況にあった事、年齢の事、フェイト・テストロツサの事も考慮され、そこまで重い刑にはならないだろう。せいぜい数年の勤労奉仕くらいだ。

「当人も嘱託資格を取るつもりらしいし、特に問題無いわね」

「本当に、そうですか？」

陸斗がそう尋ねたのは、単なる気まぐれではない。

なのはと対面したのは、追いかけてこの時くらいだが、あの時の彼女は魔法を使う事を楽しんでいたように見えた。

ベテランの魔導師であるリンディから見て、なのはがどう映ったのか。……陸斗はそれが知りたかった。

「…………私の個人的な意見を言わせてもらうと、彼女をこれ以上、魔法に触れさせるべきではないと思うわ」

彼女は危うい。

今でこそ艦長職に就いた事で、前線から退いたリンディだが、魔導師として長年前線に立ってきたからこそ、感じる事もある。

長年前線に立てば、当然だが人の生き死にも関わる事もある。だからこそ、分かる。

高町なのはは未だに魔法を夢物語のようなものと捉えている。

しかし違う。魔法とは人を殺す事も出来る「力」でしか無い。

このままだと、いずれ彼女は取り返しをつかない間違いを犯す。

そうなってしまう前に、彼女から魔法を取り上げるべきではないか。

それに彼女は管理外世界の人間だ。無理に魔法の事を勉強させるよりも、現地で普通に成長させる方が彼女のためでもある。

リンディ・ハラウンが高町なのはに対して望んだのは、魔力封印にデバイスの没収、魔法に関する記憶操作だった。

リンディは報告書にその旨を記した上、上層部に提出した。……………結果は、言わずとも分かるだろう。

「彼女の才覚は本物だ。……………悔しくなるほどな」

クロノ執務官自身、一流の魔導師であるからこそ分かるのだろう。

それ故に、少しでも道を間違えたら、取り返しのつかない事態ともなり得る。

それから少し世間話をして、彼らは帰っていった。

スカウトでもされるんじゃないか、と思っていたようだが、ただ事後報告だけだったので肩すかしだった。

「なのはさんやフェイトさんと互角以上に渡り合うあなた達の才能は、凄く魅力的だけど、あなた達にはこちらでの生活があるでしょう?」

これには玲夜も素直に驚いた。

よくあるアンチSSだと、リンディ提督は「子供だろうが関係なしにスカウトする外道」のように描かれている事が多かった。

しかし、目の前にいる女性はしっかりとこちらの事情を理解した上で、その言葉を口にしたのだ。

「とりあえず、将来のビジョンの1つとして考えてはおきます」

1 番無難と思われる返答をし、その場はお開きとなった。

この先、「闇の書事件」やら「ジェイル・スカリエツィ事件」やら色々あるかもしれない。この時点で原作からかなり剥離してしまったため、どうなるか分からない。

まあ、頑張れば何とかなるだろう。

連続転生物語「リリカルなのは」編（後書き）

次回はA・S、そしてStSです。

転生兄妹 in デジタルワールド（前書き）

あの兄妹が出てきますが、転生物ではありません。
あくまでも名前だけです。性格も容姿もまったく違いますのでご容
赦を。

転生兄妹 in デジタルワールド

世の中には不思議がな事がたくさんある。

私は元々、非科学的な事はあまり信じていない性質ですけども、やはり気になってしまふのは仕方がないのでしょうか？

それはともかくとして、私の中ではダントツに不思議な出来事に分類されているのは2年前……1999年のお台場で起きた、ある事件。

何でもお台場が霧で覆われて、まったく連絡が取れない陸の孤島状態になったのだとか。

で、しかもそのお台場では巨大な怪物が現れて暴れ回ったとか、墜落しかけた飛行機が別の怪物に助けられたとか、そーゆー噂が流れた。

……いえ、私もそれだけなら別に信じたりしませんよ？ 単に霧の事も不思議な事の一言で済ませるでしょうし。

そのお台場事件の後、世界中に一斉にオーロラが出現した。しかもそのオーロラには全く違う世界……異世界の光景が映し出された。

私も否定したかったんですけど、実際目の当たりにしちゃいましたからねえ。

そして今、どうして私がこんな話をしているかと言うと……。

「風峰玲夜だな？」

どことも知れぬ場所に飛ばされた私の目の前に、その怪物がいますから。

「飛ばされた」とか、きつと何言ってるのか分かりませんよね？

えっと、いつものように家に帰ってきた私なんですけど、パソコンを起動させたらいきなり手のひらサイズの携帯端末が画面から出てきまして、何だろうと弄ってたらいきなりメールが届いたんです。

『デジヴァイスを画面に向ける』って。

何の事が分かりませんが、とりあえずそのデジヴァイスとかわしき端末を画面に向けたらいきなり光に包まれて……………ここにいた、という事です。

「……………そうですね、あなたは？」

「自己紹介が遅れたな。俺の名はブイドラモン」

そう、青い竜の怪物……………ブイドラモンは答えた。

ブイドラモン 世代／成熟期 種族／幻竜型 属性／ワクチン

広大なデジタルワールドでもフォルダ大陸にしか存在しないと言われる、幻の幻竜型デジモン。それがブイドラモンだ。

その存在は極めて貴重であり、滅多に出会う事はなく、生態は謎に包まれている。

必殺技は、口から吐き出す高熱の熱線『ブイブレスアロー』だ。

「ブイドラ、モン………？」

「そうだ。………いや、お前にもまた1から説明しなければならなのか」

厄介な、と言いたそうにブイドラモンがガシガシと頭を掻く。

「済まないが、一緒に来てもらえないか？ 俺の口から説明するより、あの方から直接聞いた方が理解しやすいだろう」

「は、はあ」

そのままブイドラモンは私に背を向けて歩き出す。

ここに留まっけていても、どうやって帰ればいいのか分からないので、とりあえず付いていく事にしよう。

………それにしても、ここどこなんでしょうか？　なんていうか、神々しい感じがするんですけど………。

「ここはデジタルワールドの中枢………神の領域カーネルと呼ばれる場所。俺でさえ滅多に立ち入る事の出来ない場所だ」

私の疑問を察してくれたのか、ブイドラモンが歩きながらそう答えてくれる。

デジタルワールド………カーネル………聞いた事の無い単語です。何だか、不思議に溢れてますね！

「………変わっているな。実際、俺を見たら人間は怯えると思ってたんだが」

「いえ、何て言うかすごくワクワクしません？」

好奇心が疼くって言うか、ほら未知の物がそこにあると「知りたい」って思ったりしません？

私はどうも人一倍そういつた感情が強いらしく、躊躇わずに飛び込んじゃうんです。

……まあ、それで兄さんに怒られたりしてるんですけど。

「……………そうか」

再び歩き出すブイドラモン。

気のせいでしょうか？ さっきよりも雰囲気が柔らかくなった気が……………。

「ついたぞ」

考える暇もなく、目的地と思わしき場所に到達する。

そこで待っていたのは天使だった。

……………いえ、比喻表現じゃなくて、本物の天使です。背中には6枚の羽、右手には槍、左手には円形の盾のようなものを持った、鎧に包まれた天使。

その天使の前で、ブイドラモンが跪く。

「オファニモン様。仰せの通り、連れて参りました」

「ええ。ありがとう、ブイドラモン」

そう言うと、天使は私に視線を向ける。

顔の半分が兜で覆われているので、表情は完全に把握できないけど、私にはその天使がとても優しく感じられた。

「初めまして、私の名はオファニモン。このデジタルワールドを守護するデジモンの1体です」

オファニモン 世代／究極体 種族／座天使型 属性／ワクチン

女性型天使デジモンの最終進化形である座天使型デジモン。

セラフィモン、ケルビモンと共にデジタルワールドの中心部『カーネル』を守護する三大天使型デジモンの一柱でもある。

必殺技は『エデンスジャベリン』と『セフィロートクリスタル』。

「あの、そもそもそのデジモンって何ですか？ それにデジタルワールドって……………」

兼ねてよりの疑問を、私はオフアニモンにぶつける。

さっきのブイドラモンの様子からするに、ここで私の疑問について答えてくれるはず。

「そうね……………簡単に説明すると、あなた達が暮らす世界とは別次元の世界。異世界と言った方が分かりやすいかしら？」

「なるほど。……………では、デジモンというのはそのデジタルワールドの住人、という認識でいいのでしょうか？」

「ええ」

満足げにオフアニモンが微笑んでいるのを見て、私も納得する。

つまり、私はあのデジヴァイスというのを使ったため、異世界へと移動した。

でも、何で私がわざわざ呼ばれたりしたんですか？ ブイドラモンも私の名前知ってましたし……………」

「では本題に入りましょう。デジヴァイスは持っていますね？」

「あ、はい」

「ごそごそと、ポケットからデジヴァイスを取り出す。

白と水色で分けられたカラーの端末だ。握りやすく、しっくりくる。

「あなたを呼んだ理由。それについて話すには、まずあなたのお兄さんについて話さなければなりません」

「……………」え、あの、どうしてそこで私の兄の話が出てくるんです？」

「うちの兄は……………」その、色々と変わった人だ。

「私より3歳年上の14歳。間違いなく同世代の子供の中では抜きんでて変わった人だと、自信を持って言える。」

「あなたのお兄さんに託したデジタマが、このデジタルワールドを滅ぼす闇になるかもしれせん」

「……………」はい？」

休憩時間中、携帯電話が振動する。

ディスプレイに表示されている相手の名前は、風峰玲夜。うちの妹だ。

そろそろ来るかなーと思っていたので、少しは覚悟が来ている。軽く深呼吸すると、通話ボタンを押して耳に当てる。

「はい、もしもし」

『勝手に何やってんですか、兄さんッ!』

おーう、やっぱり来た。

ハウリング起こしそうな音量に、僕の回りにいたスタッフさんも目を丸くしている。

苦笑いしつつ、軽く頭を下げて通路に出て、人通りの少なそうな機材の影に入る。

「声が大きい」

『す、すみません。……………って、そうじゃなく！ あなた勝手に何してるんです!?!』

「あ、オフアニモンから聞いたんだ」

いやゝ、驚いたね。いきなりデジモンとかデジタルワールドとかデジヴァイスとか、謎単語が飛び出すんだもの。

『勝手にデジモン預かったなんて……………しかも世界を滅ぼすかもしれないって何なんです!?!』

あれ、説明されたんじゃないの？

『説明されましたけど、兄さんの名前出てきた瞬間に全部吹っ飛びましたよ!?!』

あゝ、この様子だとオフアニモンやブイドラモンも辟易してたかも。
この子、基本的には礼儀正しくていい子なんだけど、時々こうなるから。……………その内、謝りに行こう。

「つまり、僕が預かったデジタマ……………まあ、デジモンはちょっと特殊って事」

そっと、ポケットからデジヴァイスを取り出す。そしてその液晶にはドット絵でタマゴが映し出されている。……………普段から色々忙しいので、なるべく一緒にいる事が出来ないかと尋ねたところ、この機能を追加してもらった事が出来た。

これはかつて、デジタルワールドを闇に陥れようとした『七大魔王』の石柱、リリスモンの卵。

闇のデジモンの中でも抜きんできた力を持つ7体の魔王型デジモン。それが七大魔王。

オフアニモン達、デジタルワールドを守護するデジモン達と戦い、七代魔王の内の何体かは倒され、封印された。リリスモンもその内の1体で、長い間デジタマの状態で封印されていたらしい。

でも、いつまでも封印しておくわけにもいかない。ずっと封印しておいて、いつ暗黒デジモンに奪われ、復活されるか分からない。

そこでオフアニモン達は1つの手段を執ることにした。それが人間

の子供にデジタマを託す事である。

元々、デジモンの進化はパートナーとなる人間の心に影響される。心が正しい道を示せば正しい進化をし、間違った道を示せば間違った進化……暗黒進化を引き起こす。

当然この意見は反対する者も多かった。1歩間違えばデジタルワールドだけでなく、人間界も闇に落とす事になる。

だから、パートナーとなる人間も慎重に選別されて、そして……僕が選ばれた。

『……でも、何でそんな危険な事を引き受けたりしたんです？ オファニモンの話だと、ほとんど即答したって』

「ほっとけなかったからかな」

闇のデジモンって言っても、最初は他のデジモンと遜色変わりなかったんだと思う。

それがどうして悪いデジモンになったのか。それはきっと、成長する中で何かがあったから。

全ての事に理由はある。それは善悪限らず、ありとあらゆる事に。

「それにさ、リリスモンがやった事は生まれ変わったこの子には関係ないでしょ？」

例えば、僕の前世が凄い極悪人だったとする。それが今の僕に何か関係ある？

『……………はあ。まったく、いつもこうなんですから』

む、何だかバカにされたような気がする。

『でももし、そのデジタマから生まれたデジモンが、かつてのリリスモンのような事をしようとしたら……………どうするんです？』

「そうならないように僕がいるんだよ。それにもしそうになったら……………僕が止める」

オフアニモンやセラフィモン達は、僕を信じてこの子を託した。

この子を守り、そして導く事。それが彼らに信じられた僕の役目。

……………どうして僕なのかだけは、何度尋ねても教えてくれなかったけども。

『……………なら、私は何も言いません』

「ん、ありがとう」

『と言うより、私も託された側ですし』

……………あ、やっぱりそうなんだ。

万が一の時に備えて、オフアニモンは僕に近い者……………つまり玲夜に、ブイドラモンをパートナーとして託すと話していた。

何でもブイドラモンは極めて強い力を秘めたデジモンで、最終的には七大魔王に匹敵する力を持つデジモンへと進化を遂げるという。

つまりリリスモンに対するカウンター、という事になる。

もちろん、それだけで玲夜が選ばれたのではない。玲夜にもブイドラモンをパートナーとするだけの素質があったからこそ、デジヴァイスとブイドラモンを託されたんだろう。

「RUNEちゃん、休憩終わりです！」
リユネ

「はい！……………ごめん、そろそろ時間だから」

『分かってます。でも、帰ってきたらその子にも会わせてくださいね』

「うん。じゃね」

通話を切り、携帯とD-3をポケットにしまう。

さてと、お仕事頑張りましょうか！

この翌日、デジタマが孵り、僕らの日常が緩やかにだけでも変化していく。

そしてさらに数ヶ月後、デジタルワールドに1人の少年が現れたのをきっかけに、僕らの運命の歯車は回り始める。

転生兄妹 in デジタルワールド（後書き）

と言うわけで、デジモンアドベンチャー02から物語は始まります。基本的に原作沿いに物語は展開されていきますが、あくまで陸斗と玲夜の視点が中心なので、少しオリジナルの展開になるかもしれません。

……まあ、「にじファン」で純粋なデジモンの小説が少ないので、どうせなら書いてみようと思ったわけですね。

先に言っておきますが、フロンティアまでは見てました（ただし、ほとんど憶えてません）。セイバースは序盤数話だけ。クロスウォーズに至っては全く分かりません。

なので、私が書けるお話は基本02までです。ティマーズも本当にぼんやりとしか……。

転生者バトルロイヤル（前書き）

活動報告で書いたとおり、とある台詞から生まれたネタです。
……これ、マジで書いてみようかな。

転生者バトルロイヤル

「これからあなたたちには、殺し合いをしてもらいます」

その言葉が、全ての始まりだった。

「……………というわけで、今回もやってきました。『転生者バトルロイヤル』の時間です!!」

司会の女性の言葉に、会場中が色めき立つ。

「二次元へと転生した主人公達。欲と欲のぶつかり合い、意地と意

地の張り合い。お互いを殺し合い、勝ち残って『オリ主』の栄冠を掴むのは誰だああああっ!!」

「……………相変わらず悪趣味」

興奮と熱狂に包まれる会場の中で、その少女だけは冷静だった。つまりなさそうな目で、巨大なモニターを見つめている。

彼女も今回のゲームを開催する側……それも直接ゲームに参加する者『転生者』を選抜する仕事を行っている。

「なんじゃ、まだこんなところにおったのか」

美女と言っていい女性が彼女に近づいて来た。

その女性もまた、開催側の関係者。ゲームのプログラミング、大まかな設定作業を行う部署にいる。

ちなみにこの2人、友人でもある。

「だって、悪趣味だし」

「仕方なからう。こういう事ぐらいしか楽しみは無いからの。……………」

…それにそなたもなんやかんやで楽しんでおるではないか」

彼女は少女の隣に腰掛ける。

少女は不満そうだったが、何も言わずにそのままモニターへ注目を戻す。

「そろそろ始まるぞ。……………今回の参加者はどういった輩がおるか
のう」

「え？」

「おい、ここどこだよ」

彼らは目を覚ますと同時に、混乱が起きる。

気がつくと、自分達の知らない場所にいたのだ。混乱するのは無理も無い。

真っ白な空間。何も無くて、ただただ真っ白な世界。

「さて、選ばれた皆さんこんにちは」

そしてそこに、1人の少年が現れた。

につこり微笑むと、目の前にいる人間達を見渡す。

「おいガキ、ここどこだよ。てかお前誰だ」

「まあまあ落ち着いて。それについて説明するので、少し黙っててくださいね」

少しして騒ぎが収まり、少年はおほんと咳払いをして口を開く。

「これからあなたたちには、殺し合いをしてもらいます」

その言葉に、空気が凍った。

集められた者達は、信じられないものを見るような目で少年を見つめている。

しかし、少年はやはりにこにここと微笑んでいる。

「シンプルでしょう？ バカなあなた達でも分かるくらいに」

「ふざけんな!!」

さすがに腹に据えたのだろう。

男性の怒りが爆発し、次々と不満不平が上がり始める。

「そうだ！ 殺し合いだと!？」

「私たちをなんだと思ってるのよ!!」

「バカ言っ てんじゃねえ!!」

だが、当の少年はにこにここと微笑んで、全く堪えた様子を見せない。

それどころか、微笑んだまま……………。

「黙れよ、クズ共」

そんな衝撃的な発言を吐き出した。

見目愛らしい少年が、外見とはとても似つかわしくない言葉を言い放つ。

あり得ないほどのギャップに一同は強制的に沈黙させられた。

「寧ろ感謝して欲しいくらいなんですよ？ あなた達みたいな社会のクス共に、私たちはチャンスをおあげるんですから」

「チャンス、だと……………」

「そう！ 見事、このバトルロイヤルを勝ち抜いたその人に与えられる栄誉！ 如何なる願いも私たちが叶えて差し上げましょう！！」

どよめきが広がる。

「あなたが元の世界に戻り、その上で何かを願うもよし！ 勝ち抜いたその時に願うもよし！ どんな願いも私たちが叶えて差し上げます」

「……………その言葉の信頼性は？」

集められた者達の中から、やけに眼光の鋭い男がそう尋ねてくる。

少年は面白そうにその男性を見つめながら、質問に答える。

「残念ながらありませんね」

「だったらさつさと俺たちを元の場所に戻せ！」

「出来ませんよ？ だってあなた達……………死んでるんですもん」

再び、全てが凍り付いた。

そう。選抜をかける前提条件として、死者である事……それも自殺した人間である事が揚げられる。

ここに集められた者達は全て、経緯や手段は異なるも、自ら命を絶った人間なのだ。

……そしてようやく自分達が死んだ人間である事を思い出し、顔色を変え始める。

「分かりましたか？ あなた達はもうどこにも行けないんです。元いた場所に戻す？ 死んでおきながら何言ってるんです」

「…………俺たちに何をさせようっていうんだ」

「言っただでしょ。『殺し合ってもらいます』って」

簡単に言うならば、娯楽。

この様子は全て“向こう”へと中継されているが、それを知る由は無い。

「どうします？ もし勝ち残る事が出来たら、元の世界へオマケ付きで戻る事が出来るかもしれませんよ？」

.....

少年の容赦ない言葉に、今度は沈黙が訪れた。

……しばらくして、1人の男性が前に進み出る。

「……俺は、やるぞ」

「俺も！」

「私も！」

「あたしも！！」

男性の言葉を皮切りに、どんどん声^{こゑ}が上がる。

少年はそれを見て、満足そうに微笑んだ。

「それではルールの説明に移らせていただきます！」

その瞬間、1人1人の手に分厚い本が出現した。

『第43回転生者バトルロイヤルルールブック』という表紙で綴じられている。

「あなた達はこれから、とある物語の世界に転生していただきます。その世界を舞台に殺し合って頂くわけですが、絶対に遵守していただきたいルールがございます。まず、最大のルールとしまして、その物語が破綻してしまう行動を取る事を禁止と致します。物語の主人公を殺害するなど、そういった行為を取ろうとした時、私どもより警告が出されます。警告を無視してそれらの行為を行った場合、即座に失格とします！」

「その物語って、なんなんだ？」

「いい質問です。では、これからそれを決めさせて頂きます!!」

少年がパチンと指を鳴らすと、今度はルーレットが出現した。

円形的には『魔法先生ネギま!』や『NARUTO』など、漫画やアニメの名前が書かれている。

それを見た一同の中から「あんな世界に転生するのか……?」という声が囁かれる。

「では、ルーレットスタート!!」

再び指が鳴らされると、ルーレットが回転を始める。

と、どこからともなく鉄の串を取り出し、勢いよく回転するルーレ

ット目がけて、少年が投擲する。

乾いた音と共に串は的へ突き刺さり、ゆっくりと回転を緩め始め、やがて完全に停止した。……………そこには。

「皆様の転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界です。おめでとうございますー!!」

めでたくない。

半分はともかく、もう半分はげんなりとしている。

何が悲しくてリリカルな白い魔王の世界に転生しなくちゃならんだ、と言わんばかりの顔だ。

「リアルなのはタソやフェイトタソに会えるのか!？」

「萌えて……………じゃなかった、燃えてきたぞー!」

……………この発言は聞かなかった事にしよう。

「おほん……………細かいルールはそちらのルールブックに記載されています。では! 転生における各種設定を行いますので、順番にどうぞー!」

転生者 A（性別：男 享年 31 歳 死因：服毒自殺）の場合。

「何？ 何でもオーケーなわけ？」

「はい。容姿、生まれ e t c ……ご自由に設定いただけます。もちろん、ルールブックに記載されているルールに抵触しない限りは」

「能力は？ 他の作品の能力とかもか？」

「ええ。ただ、能力によっては制限させていただく事もありますので、ご注意ください」

「……………よし、じゃあ俺は……………」

転生者 B（性別：男 享年 34 歳 死因：首吊り自殺）の場合。

「まず、サラッサラの銀髪に赤と緑のオッドアイ。能力はSSSランク魔導師で、デバイスは剣型のエクスカリバー。能力に『一方通行』と『無限の剣製』^{アンリミテッド・ブレイドワークス}。これでどうだ？」

「……………はい、受託しました」

「よっしゃあ！ で、なのはの幼馴染に生まれるようにしてくれ！」

「……………分かりました」

転生者C（性別：女 享年20歳 死因：ドラッグ中毒死）の場合。

「アタシ、スクライアー族に転生させて！」

「はあ。ですが何故スクライアーに」

「決まってるじゃん！ ユーノ君ゲットのためよ！」

「……………念のために言っておきますが、物語が始まらないようにしてしまうと失格になってしまいますのでご注意ください」

「分かってるわよ。だからやるのはA'sが終わってからね」

（……………ダメだコイツ）

「……………何これ、何で30人中18人が“無限の剣製”選んでるの？」

「おまけに何人も『銀髪オッドアイの超絶美形』……………今回もバカばかりじゃのう」

当然、その設定の光景も生中継されているわけである。

会場では「バカだろあいつ」や「へへ、意外と考えてるな」という声が上がっている。

「まあ、半分は最初の関門でふるいにかけられるじゃろ」

「原作始まるまでに何人死ぬと思う？」

「20人くらい死ぬじゃろ」

転生者の大半の死因が「自滅」である。

その理由はまた、追々明かされていくが……分不相応なものは身を滅ぼすただけ言っておこう。

「それにしても、最後の人は何だか随分違った」

「あの女か？ プロフィールも数段濃いし、あれは相当な場数を踏んでおるようじゃな」

「……多分あの人、最後まで勝ち残るんじゃない？」

「そうじゃのう……」

不完全な世界の果てで

どんな魂も摩耗してしまうほど、遠い遠い昔のこと……あるところに、1人の女の子がいました。

その女の子は不思議な力を持っていました。

どんなものもその手で生み出す事の出来る、万能の力です。

大人や周りの子供達は皆、彼女を褒め称えました。

しかし、次第に彼女から離れていきます。

皆、その女の子が……女の子の持っている力が怖くなったのです。

1人……また1人、女の子から離れていきます。

けれども1人だけ、女の子から離れなかった人間がいました。

「どうして側にいるの？」と、女の子が尋ねます。

「一緒にいたいと思っちゃダメ？」と、男の子が答えました。

男の子にはこれといって不思議な力はありませんでしたが、彼だけが女の子を恐れませんでした。

やがて、2人だけになってしまったその子達は、村を出て旅に出ます。

その旅の中、2人は女の子と同じように不思議な力を持っている人達と出会います。

力を持っているために、周囲から孤立し、独りぼっちでいた人達です。

その人達も仲間に加え、彼らは旅を続けます。

長い長い旅の果てに、その世界に自分達の居場所が無い事を悟りました。

「なら、自分達の世界を創ってしまおう」

女の子と男の子はそう考えました。

女の子の力は、その世界から遠く離れた場所に、新しい世界を創ったのです。

その世界に移り住み、まず最初に女の子は“人”を創りました。

その世界と同じモノで出来ている、その世界でしか生きる事の出来ない存在です。

どうせなら不思議に溢れた存在にしようと、茶目っ気も含ませて、普通とは違うモノにしました。

犬や猫みたいな動物の特徴を持つ人間。自分達の世界にはいなかった、御伽噺に出てくるような生物。

2人はその世界を「不思議に溢れた」世界にしようと考えたのです。

長い時を経て「始まりの2人」と呼ばれるようになった女の子と男の子。

2人の間にも愛が育まれ、女の子が生まれます。

「アマテル」と名付けられたその子供は、1人の剣士をパートナーにして、大冒険を繰り広げます。

その果てに、最初に移り住んだ人々やその子供達と共に、1つの国を作り上げます。

後に「ウエスペタルティア」と呼ばれる国。アマテルはその国の女王様となりました。

やがて時を経て、女の子によって創られた不思議な人々は自分達の国を作り始めます。

不思議な人々が作ったその国は、後に「ヘラス」と呼ばれるようになります。

……………そして時は流れて百数年、ある事実が発覚します。

「馬鹿なっ!!」

1人の男性が、机に手を打ち付ける。

机の上には1枚の紙。そこには側にいる女性が何度もシミュレートし、結論づけられた事実が記されている。

いずれ来る、滅びが。

「……………これは、事実なのですか？ お母様」

ローブを着た女性が、自身の母に対し、そう問いかける。

青い顔のまま彼女は頷き、肯定の意を示す。

「およそ2000年後、この世界は……………滅びる」

ハッキリと宣言された滅びの予告。

男性はさらに険しい顔となり、ローブの女性も唇を噛み締める。

……数百年前、「始まりの2人」の片割れによって創成された新世界。それは地球から遠く離れた火星に築かれた「人造異界」だった。

火星が宿す膨大な魔力を利用し、擬似的な世界を創成。地球と変わらぬ世界を生み出し、彼女達は移り住んだ。

その滅びの理由、それは……魔法力の枯渇。

「でも、どうして今になって……」

「……繁栄し過ぎたんだ」

男性が、静かに呟く。

余程の事が無い限り、魔法力の枯渇などという問題は出てこない。

しかし、この世界は繁栄し過ぎた。

亜人は増え、国が生まれ、世界は成長していき……許容量を超えてしまった。

故に、火星の魔法力も限界を超えてしまい、いずれ滅びるという結論が出てしまったのだ。

「…………私の、所為だ」

女性が、呆然と呟く。

悲しみ。彼女の表情にはただ、それのみで染まっている。

「私が……何も考え無しに世界を創ったから」

だから、この世界のみならず、火星までもを殺してしまう。

惑星の魔法力とはその惑星の生命力に他ならない。

生命力が無くなれば、どんな生物も死を迎える。

通常ならばそれは数億年先の話であるが、この世界は魔法力によって成り立っている。

故に…………他の惑星よりも滅びが早まってしまった。

「私が、私がこんな力を持っていたから……………」

「違う」

「私なんて、生まれてこなければよかったんだ！」

瞬間、乾いた音が響いた。

男性が女性の頬を張った音だ。

これにはローブの女性も驚いた。

夫婦喧嘩を目にする事は多々あったが、父が母に手を挙げるような事はこれまで1度も無かったためである。

「……………そんな悲しい事を言っんじゃない」

「あ……………」

「それに、君のやった事は間違いなものか」

男性が、外を見渡す。

そこに広がっているのは墓。……………かつて、「始まりの2人」と共に移り住んだ人々の墓所だ。

元はウエスペタルティアの中心として栄えた場所。しかし現在は王家と限られた者のみが立ち入る事を許された、古い都市。

いつしか、ここは「墓守り人の宮殿」と呼称されるようになっていた。

「皆、君の事を恨んでいたか？ そりゃあ色々思うところはあったかもしれないが、自分達の居場所を得る事が出来たんだ。……間違いだなんて言わせないよ、アリエル」

「……………イーファ」

2人が見つめ合い、そして……………。

「……………おほん」

「「！？」」

「2人だけの世界に突入するのは悪くないですが、それは後にしてください」

実の娘の前でイチャつくのもいい加減にして欲しい。

無表情ではあるが、その目には静かなる怒りが灯っており、そう思っている事がひしひしと伝わって来た。

表舞台から退いて数百年。この夫婦のラブラブ度に当てられて来たのだ。……………このままだと、口から砂糖が出るかもしれない。

「とにかく、時間はまだある。ゆっくり考えて、それから行動に移せばいい」

「……………そう、だな」

2000年しかない。

2000年もある。

残された時間をどう捉えるかは彼ら次第だ。

少なくとも明日世界が滅びるわけではない。どうするか考える時間は残されている。

「……………人手が足りないな」

がしがしとイーファは頭を掻く。

現在の彼らの居住地「墓守り人の宮殿」は、王族を含む全てのウェスペタルティア人の墓所である。

その地において、彼ら3人が住まうのは宮殿最奥部。

この地に住まう墓守の一族でさえ立ち入らず、彼らの存在を知る者は極めて少ない。

他にはウェスペタルティア王国の上層部……王家の限られた者と、政治的な要職に就いている者のみが彼らの存在を知っており、特別な状況下においてのみ、彼らに拝見することが叶う。

ぶつちやけ、彼らの同士となり得る人間が少なすぎる。

「……………創るしかないか」

アリエルの「創成」の力のように、彼は万物に通ずる力を持っているわけでもない。

しかし、イーファには才能があった。

人形師としての能力。彼は最高位の人形遣いであつた。
ドールマスター

「“器”は僕が作るからさ。君は命を吹き込んで。なるべく強い存在になるように」

「う、うん」

これは少なくとも、数百年ぶりの大仕事だ。

何せ、この世界を創った時と同じ……………否、それ以上の大仕事になる。今はまだ表立って動く時ではない。裏でこそそそやりつつ、力を蓄える。

彼らの長い戦いが始まった。

不完全な世界の果てで（後書き）

「ネギま」も魔法世界編が終わって、やっと日常編に戻って来たわけなんですけど……まあ、色々矛盾やらツッコみどころはあるわけで……。

少なくとも分かっている事もありますので、私もそれを参考に新しい話を書いてみる事にしました。

分かんとは思いますが、今度のお話は「完全なる世界」側です。

・造物主は女性（未だに本名不明なので「アリエル」にしました）。
オリ主とは夫婦で、その娘がアマテル。

・「墓所の主」アマテル

現時点で言えるのはこれくらいの捏造ですかね。

でも「墓所の主」アマテル」というのは、何となくありえそうな気がするんですよ。

ネギの事を「我が末裔」と言ってますし、ウエスペタルティア王家に連なる人間なのは間違いないですし。

造物主の娘であるため、「不滅」の特性を彼女も受け継いでいて、それで彼女もそのまま生き続けている………とか？

少なくとも「御狐様」がありますので、やるとしてもほんと〜に息抜きになるかと。

実際、綺麗なネギ君を書くのに疲れ果てたら、こっちで毒吐くかもです。

連続転生物語「NARUTO」編（前書き）

本編じゃなくて、ネタばかり思い浮かぶ……。
本当にどうしよう。

連続転生物語「NARUTO」編

「よりによって『うちは一族』かよ、コンチクショウ!!」

通算8回目となる転生を迎え、俺 うちはりクト は思いっ
きり吠えた。

知ってるかもしれないが、一応説明させてもらう。

俺たち兄妹は生前（これは1度目の真つ当な人間だった頃の事を指す）、不慮の事故によって本来死ぬべき時ではない時に死亡してしまい、その事で魂が輪廻転生のシステムから外れてしまった。

そんな除外者となった俺たちにその旨を伝えたのが、システムその物（何故か俺たちには幼女に見えるように設定されていた）。その上で、空きのある場所へと無理矢理組み込み、どうにか転生させたのだが……何故かその転生先というのが、よくあるアニメや漫画の世界ばかりで、とにかく苦労している。

最初の頃はほら、やっぱり物珍しいし、魔法やらそーゆーのがあるから俺たちとしても楽しんでたんだよ。

でも、本当に死亡フラグが乱立する世界ばかりなんだよ！『ゼ口の使い魔』は置いておくとしても、『コードギアス』は青春時代は戦時中だし、『ドラクエ』は普通に魔物出てくるし！

挙げ句の果てにこれは何だ？『NARUTO』だと！？ふざけんな！！

「……………アイツ、絶対今度戻ったらぶん殴ってやる」

話を元に戻そう。

NARUTOというのは少年漫画の1つで、落ちこぼれの少年忍者である『うずまきナルト』の成長を描く、王道的な少年漫画の事だ。そして俺が生まれ落ちたうちは一族。これはもう1人の主人公と言われる『うちはサスケ』の一族の事だが、ある事からサスケの兄、うちはイタチによって滅ぼされる。

……………つまり、現時点においてまだ4歳にも満たない俺にも死亡フラグが立っているわけである。

これはシャレにならない。下手な行動して死亡フラグが立つならともかく、何もしていないのに滅亡確定なのはヤバイ。

誰だって死にたくないし、出来るなら幸せになりたい。

とはいえ、下手に干渉するのもヤバイわけだし……………どうするか。

（１番簡単なのは、イタチの虐殺時に里から逃げる事だが……………）

問題なのは、イタチの追撃に遭わないかという事。

相手はうちはイタチ……………間違いなく忍の世界において、最強クラスと言っても過言ではない実力の持ち主。

ハッキリ言って逃げ切る自信は無い。身代わりを用意すれば何とかなるかもしれないだが、やはり見破られる危険もあるし、そもそも身代わりをどうやって用意するんだという話になる。

なので、里から逃げるという選択肢は無しだ。

（……………マジでどうしよう）

この数日後、その懸念は思わぬところで解消される事となり、安堵する事を俺は知らない。

うちは一族がクーデターを目論んでいる。

既にイタチによってその情報は上層部に流れており、うちは一族を排除すべきという意見が強まっている。

ご意見番2人にダンゾウもそう訴えている反面、火影の爺様だけではうちは一族との和解を唱えているが………数十年にも及ぶ軋轢はそう簡単には解決しないだろう。それこそ爺様が火影を辞してその座を明け渡すくらいしなければ。

だが、それは出来ない。もし里長が急遽交代という不安定な状態に陥れば、他の里につけ込まれる恐れがあり、そうなれば木ノ葉隠れの里の存在をも揺るがす事態にもなりかねない。

だからこそ、木ノ葉で最も優秀な血継限界を持つうちは一族を殲滅しなければならぬ、という事態にまで発展してしまった。

（だからこそ、俺たちは生きなくちゃならない）

殲滅されるであろううちは一族。生き残るのは、下手人として里を抜けるイタチ、イタチが唯一殺せない相手であるサスケ。そして……「うちは」の血を残す事を条件に、保護を受ける事が出来た俺と母さん。

元々、母さんはクーデターには反対しており（反対している人間は少数だがいるらしい）、その事でうちは一族では浮いた存在となつてしまい、「どうせなら」と毒を喰らう決意火影の爺様へ嘆願に行つたらしい。

爺様としても、やはり避けられる争いならば避けたいと、俺たちの保護には賛成だったが、ここで問題となったのはダンゾウとご意見番の2人。

うちはの人間を残しておけば、九尾事件の時のように問題が起きるのではないか？

確かにあの事件はうちはマダラによって仕組まれたのだから、その懸念は正当なものだ。

このままでは自分達の身が危うい。そこで一か八かの賭に出てみる事にした。

「うちはの血………“写輪眼”を持つ者を絶やしてしまうのは惜しくないんですか？」

写輪眼は、木ノ葉において最も優秀な血継限界。

ズバ抜けて高い動体視力。あらゆるチャクラを視認し、影分身すら見抜く。そして条件さえ満たせば、最高瞳術とも言われる「万華鏡写輪眼」すらも開眼する。

………最初に言っておくとだが、俺は生まれた時から万華鏡に開眼していた。

「親しき者の死」を経験した憶えなんて無いんだが………当時はその事で相当注目を浴びたりしていたとか。

話を戻すが、とにかく写輪眼は絶やしてしまうには勿体ない能力だ。それに写輪眼を持たずとも、うちは一族は忍として優れた才覚を持つ者も多い。

つまり、うちは一族殲滅は極めてリスクが大きい。

滅ぼさなければクーデターで里はボロボロになるし、かといって滅ぼせばうちは一族という優秀な忍達が姿を消す。

だからこそ、俺はこの賭けを持ち出した。

「俺がうちは一族を再興します。生き残りさえすれば、またいずれ蘇ります」

うちはを完全に斬り捨てるのは惜しい。

その中でも俺は、イタチにも並び称されるほどの麒麟児とまで言わ

れている（自分で言ってて恥ずかしいが）。

「……………いいだろう。だが、二度目はない。分かっているな？」

意外にも、俺の言葉に最初に了承の意を示したのはダンゾウだった。悪く思われがちだが、ダンゾウの行動理念の根底には木ノ葉を守る事がある。火影になろうとしたのも、写輪眼を手に入れたり大蛇丸と接触したりしていたのも全て、木ノ葉隠れの里のため。そこに私欲はない。

ダンゾウが了承した事で、ご意見番の2人も重い腰を上げた。

これにて、どうにか身の保障だけはされたわけなのだが……………1つ問題が浮上した。

一族を復興させるにはやはり、うちの血を引く人間を増やす事が何よりも重要だ。

既に三十路を越えている母さんは、もう何人も子供を産めない。必然的にその役目は、若い男である俺と生き残るであろうサスケに委ねられる。

言い方こそ悪いが、要するに「子供作れ！」と言われたに等しい。

……………さすがの爺様達も、そんなリアルにアダルトな話を子供にするのは躊躇われたのか、気まずそうに告げたわけだが。

「…………泣きたい」

次々と届けられる見合い写真に、思わず机に突っ伏す。

裏事情を知らない者からは、これは単なる見合い写真だと思われる。

しかし、その実態は「うちは」の血筋を後世に残すため、選別されたくのいちのリストだ。…………ぶっちゃけ、この中から相手選んで子供作れと言うわけだ。

…………自分で条件出しとして何だが、精通も来てない8歳の子供に何を求めているんだあのジジイ共は。

いや、確かにただそれだけを聞いたら、羨ましいと思うだろう。これも言い方は悪いけどもよりどりみどりなんだし。

でも、せめて後数年待ってくれと言いたい。

「おっす！…………なんだなんだ、相変わらず辛気くさい顔してんな」

「…………ナルトか」

窓から入ってくる友人に、顔を向けずに答える。

何故、うずまきナルトと交友関係を持つに至ったのか。

何でも母さんはナルトの母親、うずまきクシナとは同期らしく、色々張り合ったライバルだったとか（忍術とか恋とか）。

その縁で、忘れ形見であるナルトが冷遇されてるのが氣にくわなかったらしく、何かと世話を焼いている。……まあ、俺としても避ける必要は無いわけだし、こうして仲良くしているのだが。

里の大人からは冷たい目で見られたりしているが、今更だし。

「ん？ それ、なんだ？」

「見合い写真。……色々あるんだよ、本当に」

「へ」

適当に1冊手に取ると、パラパラめくるナルト。

「……………なんだこの名前。千手？ 変な名前だつてばよ」

「はあっ!？」

千手って、あの千手か!？

ナルトからその写真を奪い取り、確認する。

写真に写ってるのは、赤い髪の子。俺より数歳年上だろうか？
ハッキリ言って目茶苦茶美人。

名前は「千手カノン」とある。……………これ、マジであの千手なのか？

「……………ナルト、歴代火影の名前全員言えるか？」

「へ？ ああ、この前アカデミーでイルカ先生が言ってたしな。えーと、今の3代目のじいちゃんが猿飛ヒルゼン。俺が生まれた頃に死んだっていう4代目が、波風ミナト。で、初代と2代目が実の兄弟で、確か名前が……………」

「千手柱間と扉間兄弟だ」

「そうそう、そんな名前！……………ん？」

ああ、どうやらそこまでノータリンじゃなかったようだな。

「森の千手一族。……………ぶっちゃけるとだが、初代火影の千手柱間はうちの一族の始祖、うちはマダラと敵対してた」

「……………えっと、そのマダラって人、リクトのご先祖様って事か？」

「直接的な血のつながりがあるか分らんが、同じうちの血は流れてる。戦国時代に同盟を組んで木ノ葉の里を作ったが、里長……………つまり火影を決める争いに敗れ、最終的に里の方針を巡って争い、

初代火影に敗れたとされている」

まあ、どうやら死んでなかったみたいだが。

「しかし、千手一族………生き残りいたんだ」

そりゃあ、綱手が初代火影の孫だって聞いているが、その他の血縁に
関しては全く明かされていない。

もしかするとだが、こういう時のために密かに生き残りが隠されて
いたとか？

いやいや、そもそも「千手」と「うちは」を掛け合わせるって、オ
イ…………。

（何が起きるか分からんぞ……………）

そんなリクトが見合いに困っているとはいざ知らず、私はいつもの光景に悩まされていた。

目の前には、リクトとは対照的に、見合いがおしゃ力になって自棄酒かつくらう姉の姿。

「……………姉さん、飲み過ぎですよ」

この人の名前は照美メイ。そして私の名前は照美レイヤ。

実はこの人、後に5代目水影となる忍でもあるんですが……………ここだけ見ると、単なるIKIOKUREにしか

「何か言っただ？」

「ナンデモアリマセン。ソラミミデショウ」

鋭い視線を向けてくる姉に、必死にそう取り繕う。

……………ええ、これが見合いがおしゃ力になった原因なんです。

姉さんは間違いなく霧隠れでも1、2を争うほど優秀な忍です。水影に選ばれるだけの事があります。

姉さん自身それを鼻にかける事なく、里のために身を粉にして働いてきたわけなんですが……ぶっちゃけ、婚期を逃してしまっただです。

自分以外で殉職していない同期はほとんど結婚しており、気がつけば行き遅れ状態。

このままではマズイ。そう考え、婚活を始めたわけなんです………。

「どうして……どうしてこんな事に」

「いえ、それは完全に姉さんの自業自得じゃないですか」

途中まではうまく行ってたんですよ。

普通なら性格だっていいですし、見た目だってセクシーな美女。アレさえなければパーフェクトです。

ただ、婚期を気にしすぎてる感があるので、同音異義の言葉でそれ関連の単語を聞くと、思わずキレてしまっんです。

今回のお見合いも「俺、根気だけはありますから！」という意気込みを語った後、「あれ？」

時計の時間狂ってる。遅れてんのかな？」と呟いた事で、事態が

一転。

……様子見でついてきてた私たちが止めなければ、大惨事になってましたね。

「ま、とりあえず姉さんの悪癖も含めて受け入れてくれる、器の大きな人が見つかるまで、見合いは無しですね」

どちらにせよ、うちの里は陰気な人が多いですし。

木ノ葉の秋道一族なんてどうです？ 少なくとも大きいとは思いますが？ ……体格は。

「……ぶっ飛ばされたいの？」

「冗談です。でも、余所の里にも目を向けてみるのもいいかもですよ？」

そりゃあ、日向みたいな優秀な血継限界を持つてるトコは無理ですようけど。

ちなみに私としては、あんな白目向いてるみたいな人達は嫌です。

「木ノ葉ねえ……木ノ葉だったら、うちは一族がいいんだけど」

「うちは、ですか？ 写輪眼の」

「そうそう。……………美形が多いのよ、うちは一族って」

ふむ。確かに言われてみれば……………その通りですね。

うちはサスケはもちろん、イタチもそうです。他にも登場したうちは一族って、イケメン揃いだったような。

「でも、うちは一族って内乱か何かで滅んじやったんじゃないですか？　ごく少数の生き残りを除いて」

「そうなのよね……………どうせ生き残った子も里の保護でも受けてるでしょうし……………」

里の保護を受けてるんじゃない、余所の里の忍となんて無理だし。

それにしても、確かうちは一族で生き残ったのってイタチ以外はサスケだけじゃありませんでしたか？

こっちで私が聞いた話だと、数人生き残ったって……………ふむ、もしかしたら私たち以外のイレギュラーが存在しているのかもしれないね。

……なお、私は知らない。

“兄さん”がどの一族に生まれていたのか。

数年後、この人が水影に就任した後、木ノ葉から火影の護衛として誰と一緒に来るのか。

そして姉さんがその人を見て、何を考えて馬鹿げた事をするのか。

私は、まだ知らない。

連続転生物語「NARUTO」編（後書き）

えー、とりあえず一言。

「陸斗は水影に食べられます」

どういう意味で食べられるかは……ご想像にお任せします。

さすがに内容まで書いてしまうと、ノクターン行きですし。おまけに私、そういう話書いた事ないですし。

ただ、感想で意見もらって「あ、これいいかも」って思ったんです。……まあ、絶対玲夜とぶつかるでしょうけど。大惨事になるでしょうけど。2人に挟まれて陸斗は肩身の狭い思いをするでしょうけど。

名前だけ出したオリキャラ「千手カノン」。元ネタは分かるように「千手観音」です。

原作で存命の千手一族の人間って、初代火影の孫の綱手（ただし名字不明）ぐらいじゃないですか。木遁を使えるヤマトも、大蛇丸が昔「適性のある子供に初代火影の細胞を埋め込んだ」実験体の生き残りで「千手の血を引いているかもしれない」というだけです。でも、一族とまで呼ばれてるわけですし、少数の生き残りくらいどこかにいるんじゃないでしょうかね？

千手は生命力に優れた一族で、初代の血筋なわけですから、どこかで保護を受けていてもおかしくなさそうじゃないですか？

そう思い、登場させてみました。

玲夜と並び、もう1人のメインヒロインになる！ ……のかもし

れません。

NARUTOの二次、書いてみましようかね。

ただ、木ノ葉側の陸斗はともかく、霧隠れの玲夜は中忍試験辺りまであんまり出番無いかもです。

書くとしたら、ネタで出してる連続転生じゃなく「普通にnarutoの世界に転生」という形になるでしょうけど。
よければ、ご意見くださると嬉しいです。

福音の従者（ネギマ）（前書き）

ただ1つ、エヴァ物が書きたくなっただんです。
ハーレムとかは無し。ただひたすら、エヴァだけに忠実な主人公です。

福音の従者（ネギマ）

漆黒の帷に包まれた、宵の空の下。

幾多にも及ぶ氷の刃が、その命を無情にも貫いた。

「ぎゃあああああああああ！！！」

男の身体を刃が貫くと同時に、その断末魔が響き渡り、絶命した。

術を放った少女はその亡骸を見ることなく、そのままその場を立ち去ろうとする。

ふと、自分が振り返りにした賞金稼ぎたちの亡骸の中に、まだ消えていない小さな命があることに気づいた。

それは、自分よりも数歳幼い少年だった。おそらく4、5歳前後だろう。自分が殺した男たちの血を身体に浴びたため、髪や衣服否、衣服というほど上等なものではなく、ただの布を身体に巻き付けた程度のもので、血で塗れ、赤く染まっている。

女子供は殺さない。

“悪人”である彼女の数少ない信念の一つである。

「おい、名前は？」

そう尋ねたのは、単なる気まぐれだった。

「ケケケ、ドウシタゴ主人。惚レタカ？」

「うるさい」

人形の言葉は無視し、彼女はじつと少年を見る。

「イルファナ」

「そうか。……イルファナ、私と共に来るか？」

それはもう200年以上も昔の話……。その日、彼は彼女と出会った。

「おはようございます、マスター。今日もいい天気ですよ」

イーファの声が聞こえる。

だが、休ませろ。私は休みたいんだ。ぶっちゃけるとサボりたい。

「早く起きて頂かないと片付けが出来ませんので、とっとと起きてくださいね」

「むがつ!？」

布団を剥がされ、ベッドからたたき落とされる。

落とされた際、しこたま頭をぶつけてしまい、頭を押さえる。

あ、主に対してこんな真似出来るのはお前くらいだな…………。

「それはそうと、またクラスメイトの超さんが訪ねて来ましたよ？
例の件の返答を聞きたい、と」

「例の件だと？」

「ええ。そう伝えれば分かると仰っていました。人形がどうか……」

ああ、あの事か。

ちょっと前に私の技術と奴の魔科学技術を融合させて、全く新しいタイプの人形を造りたいと言っていたな。

造った人形は私の好きにしていっていいと言っていたが、使用人にしてもイーファがいれば事足りる。

だから返事については保留にしていた。……まあ、人形に対して興味が無いわけではないが。

「分かった。超には私が返事を伝えておく。……それより着替えさせろ」

「はい」

そう答えると、イーファが私の前に立ち、慣れた手つきでネグリジエを脱がしていく。

脱がし終わると今度は制服を手に取り、私に着付ける。

なんだかんだで200年。お前も随分と立派になったものだ。

「主がよかったもので」

「ふん。言っじゃないか」

くすり、と微笑むイーファ。

……ナギのアホによって、麻帆良に括られて早14年。

イーファも手を尽くしているが、この呪いは未だ解けずにいる。

おまけのあのアホは10年近く前にくたばったと聞く。卒業する頃には解きに来るとか言ってたが、結局来なかった（どうせ忘れてたんだろう、あのバカならあり得る）。

「マスター、終わりました」

「うむ」

着替えが終わり、私も軽く屈伸する。

さて、食事にするか。……イーファ。

「はい」

私の言葉に従い、イーファが跪く。

そのまま首もとのボタンを外し、首筋と肩を露出させる。

傷や染みは一切無い。無駄な筋肉も付いていない、男とは思えないほどほっそりとした白い肌。

迷い無く、私はそこへとかぶりついた。

「んっ……………」

「サウザンドマスターの子供、ですか？」

「ああ。修行でこっちへ来るらしい」

湯船に浸かるマスターが、そう答える。

マスターをこの麻帆良の地へ封印した、“千の呪文の男”ナギ・スプリングフィールド。

その通り名のごとく、千の呪文を使いこなす最強の魔法使いだと言われていますが、その実態はアンチヨコ見ないと詠唱出来ない、魔法学校中退の劣等生。

しかし、かの大戦を生き抜き、戦争の裏に潜んでいた巨悪を討ったなど、実力は確か。

……まあ、私からすればマスターに呪いなんてものをかけた、ただのアホですが。

「では、準備を？」

「当然だ。呪いを解く絶好の機会だからな」

ようやく巡ってきたチャンスなので、いつもはダウンなマスターもやる気が出ているらしい。

しかし、サウザンドマスターの子供ですか……………。

「どうした？」

「…………いえ、少し疑問が」

「言ってみる」

…………では、遠慮無く。

「その情報はどのような筋から？」

「たまたまだ。じじいとタカミチが話しているのを聞いた」

学園長先生と高畑先生、ですか。

確かに両者共にサウザンドマスターとは縁深い人物。その子供の修行について話していてもおかしくない。

…………ですが、やはり気になりますね。

「マスターがサウザンドマスターによって封印された事は、当然学園長先生や他の魔法先生の方々もご存じですよね？」

「それがどうした」

「ならば、呪いを解くためにサウザンドマスターの血縁者を狙うのは至極当たり前。それならば徹底的に隠し通すのが筋では？」

そう指摘すると、マスターも少し考えるような顔になった。

マスターがその子供の事を知れば、まず間違いなく狙う。

当然、サウザンドマスターの子供となれば超が付くほどの重要人物。害されるのは何としても防ごうとするはず。

だから、誰が聞いているか分からない場所で立ち話なんてするはずがない。

学園長先生も高畑先生も、かなりの実力者。能力が極限にまで封じられたマスターが近くにいる事くらい気づいていてもおかしくない。だから、もしかすると「マスターがいると分かっているながら」その事を話していたのでは？

「私にナギの子供の事を教えるためか？ 何のために」

「それは分かりません。ですが、何か企んでいてもおかしくはないかと」

「……………確かにな。イーファ、ナギの子供について調べておけ」

「はい」

マスターとは違い、私は麻帆良に封じられているわけではない。

そのため、その気になれば自由に外へ出る事が出来る。……もちろん、マスターを1人にするわけにはいかないため、滅多に出る事は無いのだが。

「その前に……イーファ、奉仕しろ」

「……はい」

「三つ子？」

「ええ。兄がサギ・スプリングフィールド、弟がネギ・スプリングフィールド。そして末の妹がアリス・スプリングフィールドです」

それを聞いて、エヴァは顔を顰めた。

……アリスはともかく、サギ（詐欺？ 鷺？）とかネギ（葱）とか子供に付ける名前じゃない。

親の名前から取ったであろう事は分かるが、そこまで無理に親の一文字を取るべきじゃないだろうに。

「それで？ お前の事だから、直に様子を見に行っただろう」

己の目で見た事しか信じない。

それがイルファナ・レムニアスの持つポリシーの1つだ。

一応、情報自体は集められない事はない。まほネットはともかく、裏の情報屋のツテを頼れば、英雄の子供達の情報ぐらいいは集まる。

しかし、それは人伝いで聞いた話にすぎない。真実の姿を知るには、やはり己しか頼るものはない。

そのため先の数日、イーファは「お暇を頂きます」とエヴァに告げ、単身イギリスへと向かったのだ（もちろん、正規のルートでは学園側に感づかれてしまうため、裏のルートを使つて）。その間のエヴァの世話は、起動したばかりの茶々丸に任せていた。

ごく普通の魔法使いの観光客を装って、メルディアナ魔法学院を見学し、英雄の子供達の姿も確認してきた。

「…………まず、兄のサギについてですが、彼は異常です。魔力は父親譲り、才能にも恵まれており、能力としてもまず最強クラス。10歳にしてはあり得ません」

明らかにおかしい。

それがサギ・スプリングフィールドを見たイーファの感想だった。

才能に恵まれているの一言ではどうしても片付けられない部分が多々あり、何かしら秘密があると踏んでいた。

「そうか。…………で、弟達は？」

「ネギ・スプリングフィールド、アリス・スプリングフィールド。この両名に関しては、年相応と表現しましょう。ただ……………」

ネギ・スプリングフィールドについて、イーファは思うところがあった。

教師から聞き出した話によると、幼馴染を連れてよく夜中に禁書庫に潜り込み、強力な魔法を憶えようとしているとの事。

当然、それは教師の目にも止まり、何度も注意を受けているそうだが…………うまく行っていないらしい。

彼を見たイーファの感想は「歪」である。

「彼が何故あそこまで力を求めるか分かりませんが、少なくともその部分は10歳児に似つかわしくない物だと感じました」

「なるほどな」

「最後に妹についてですが……………」

そこで口に出すのを躊躇ったのか、イーファは少し言葉を切った。

「……………どうした」

「その、普通です。兄2人と比べて、明らかに普通過ぎるんです」

友達がいて、成績は優秀で、才能もそこそこあつて……………普通過ぎる。

兄達が異常過ぎるため、その普通さが際立ってしまい、200年を生きる不死種たるイーファでも怖くなった。

教師や生徒にそれとなく探りを入れてみたりしたが、おかしいところは何も無かった。本当に普通の子供なのだ。

特別際立った能力は無い。憶えている魔法も魔法学校で教わる基本的なものだけ。

一応、本人とも話してみたが……………。

「これが中々控えめない子でして、イギリスの料理を教わっちゃいました」

「……………何をしに行ったんだ、お前は」

「まあまあ。美味しいですよ？ フィッシュアンドチップス」

ちなみにフィッシュアンドチップスとは、白身魚のフライにフライドポテトを付け合わせた、イギリスの名物料理の事である。

イギリスの屋台でよく売られている定番メニューで。ファーストフードの一種だと思って貰うと分かりやすいだろう。

よくイギリスの料理はまずいと言われるが、これは味の「まずい」ではなく、食習慣が合わない事による「まずい」である。文化が違えば食事も違う。イギリスの料理を食べずにまずいと言つのなら、まず一品食べてから判断すべきだろうに。

「それはともかく、私からスプリングフィールド兄妹について言える事はそれくらいですね」

「……………分かった。じじい共が何を考えているか分からん以上、しばらくは様子見だな」

下手に干渉すれば、エヴァを敵視する魔法先生・生徒達がうるさい。

現在、「彼女を討伐すべきだ」と叫ぶ過激派の者もいれば、「様子見ていいだろう」と唱える中立派、さらに「もっと歩み寄ればいいのでは？」と言う穏健派の3すくみが成立している。

実際に以前、過激派の人間が弱体化しているエヴァを狙い、襲撃をかけた事もあったが……その全てがイーファによって殲滅された。もちろん、殺したら余計にうるさい事になるのは目に見えていたため、魔法使いとして再起不能なレベルで半殺しにする程度で済ませただが。

その一件以来、エヴァ一派には不可侵という暗黙の了解が出来たらしく、彼女達と親密にしている者（学園長やタカミチなど）以外は滅多に接触してくる事は無くなった。

「イーファ、ガキ共が麻帆良に入ったら監視を付ける。いいな」

「はい」

……翌年1月、スプリングフィールド兄妹が来日し、弟ネギが初日から魔法バレした事にイーファは頭を抱える事になる。

福音の従者（ネギま）（後書き）

冒頭の部分は、昔私が書いていたSS（黒歴史）を手直した物です。

もしかしたらどこかで読んだ事がある人がいる……… かもしれないね。

純粋にエヴァだけがヒロインです。ただそれだけです。

ネギやその兄にはまずアンチが向けられますし、学園側にも厳しい表現が向けられるかと。“紅き翼”に対しても厳しくなっちゃうかもです。

【主人公紹介】

イルファナ・レムニウス

主人公。愛称はイーファ。不死種。外見年齢は16歳、実年齢は200歳超。

200年前、賞金稼ぎ達に使役されていた奴隷だったが、エヴァンジェリンによつて賞金稼ぎ達が殲滅され、その後彼女の気まぐれで行動を共にする事に。

経緯は不明だが、人間から不死種となった存在。エヴァの従者として200年近く仕えている。

性別は男だが、エヴァの調教によつて女性物の衣服を身につける事に忌避感を感じておらず、少女とも見間違ふ容貌から異常な程似合っている。基本的にメイド服を着用し、私服はゴスロリ服（エヴァの趣味）が多い。

連続転生物語（IS編）（前書き）

最初に言っておきますが、これは最低系です。

一夏が憑依主人公で、箒が憑依ヒロイン。ハッキリ言って中身は別人です。

おまけにかなり外道的な部分や表現があるので、人によっては受け付けないかもしれません。キャラによっては悲惨な事になるかもしれません。

この時点でダメだと思った人は、迷わず回れ右してください。

連続転生物語（IS編）

「……………これは、何の冗談だ」

突然だが、転生の別物として『憑依』というものがある。

転生だとその世界の住民として最初から生まれ落ちる事なのだが、憑依だと世界の住民に魂の状態でくつついて、その人物になる事を意味している。

もちろん、身体を乗っ取る事と同義なので、俺たちとしては罪悪感のような物を感じた事があった。最初の方は抵抗感もあったし。

……………だが、もう何百年も転生したりしてきたので、もうそんな感情はほとんど湧いてこなくなってしまったが。

それでも特定人物に憑依するという事は、ある意味最初からフラグが建ってるようなものなので、出来る事なら憑依は避けたいものだ。

例えば主人公に憑依だと、死亡フラグやその他諸々のフラグが建ってしまう。主要人物以外でも、変に死亡フラグが建ってるキャラに憑依してしまい、酷く厄介な事件が起きた事もあった。

で、何で俺がそんな話をしているのかと言うと……………。

「よりによって織斑一夏^{つむぎいかに}かよ、コンチクショウー!」

この俺、風峰陸斗こと織斑一夏のIS世界3回目の人生が幕を開けた。

インフィニット・ストラトスの世界。

最後にこの世界に来たのは、実に100年近く前になる。

その時は……確か、普通に兄妹としての転生だったな。何の冗談なのか、俺は男性操縦者で、玲夜もクラスメイト。

どんな事があつたかもうほとんど憶えていない。

だってさ、体感的に100年経ってるんだぞ？ モニターの向こうの君たちは、数年前に起きた事を事細かに憶えてるのか？ その10倍だぞ？

そりゃあ、衝撃的すぎる出来事は何百年経っても忘れないものだけだ。……せいぜいぼんやりと憶えているくらいだな。

「織斑君」

「……………はい」

山田先生に促され、起立する。

全員の注目を浴びているだけに、やりづらい。注目を浴びる事自体、何度も経験しているが、やはり慣れない。

軽く一呼吸し、言葉を紡ぐ。

「織斑一夏です。何の因果かは分かりませんが、何故かIS学園の入試会場に迷い込んで、何故かISが起動できて、気がついたら何故かIS学園に放り込まれました。この辺りに誰かしらの作為的な意志を感じずにはいられません、そんな事は関係なく、皆さんとは仲良くしていきたいと思いますので、ヨロシクお願いします」

「何故か」の部分強調してそう自己紹介すると、まばらに拍手が起き始める。

……………クラスメイトの一部や山田先生が冷や汗をかいていたように見えたので、少し気の毒になった。

なお一応、因果律に対して反逆してみた。具体的に言うと、藍越学園を受験せずに他の進学校を受験してみようとしたり。

だが運命というのは残酷なもので、何故かバスは道を間違えてIS学園の入試会場に着いてしまい、何故か入試用のISが設置されている部屋へ通されて、何故かISを起動させてしまった。

……誰かの意図がありそうで、鬱になりそうだ。具体的に言うと天災とか天災とか天災とか。

「…………真面目に自己紹介せんか」

「あ、いたんだ姉さん」

「学校では織斑先生と呼べ」

いつの間にか教室に入ってきていた姉さん……もとい、織斑先生がため息混じりにそう答える。

3年前の誘拐事件で憑依したのだが、周囲からは「性格変わった」と捉えられている。

誘拐された際に色々あったと判断されたが、その日からこの人は俺を避け始めている。

弟を変えてしまった事に罪悪感があるのか、それとも俺が“織斑一夏”では無い事に気づいて避けてるのか…………。

(普通に仲良くすればいいのに)

黄色い声を上げ始めるクラスメイトを余所に、とりあえず横に視線を向けてみる。

窓際の席に座っているのはポニーテールのファースト幼馴染。視線が合い、すつごく微妙そうに苦笑いしている。

……そうか。お前は篠ノ之箒になったのか、玲夜よ。

篠ノ之箒になってから、ハッキリ言ってロクでもない事ばかり起きている。

天災という姉がいて、その所為で各地を転々とする生活。おまけに

尋問されたり……既に幾度となく転生を繰り返す、私の鋼の精神でなければとつくの昔に摩耗してましたね。

もしかしたらいるかもしれない他の転生者には気取られないよう、なるべく原作通りの篠ノ之箒の行動をなぞりつつ、剣道も続けている。

そう遠くない時期に現れるであろう、兄さんとの再会を夢見て。

……まさか、織斑一夏に憑依してるとは思ってませんでした。

「で、主人公に憑依した感想は？」

「キツイ」

屋上にて、私たちはこれまでにについて語り合っていた。

どうやら織斑一夏としての人生はなかなか辛いところがあるらしく、げんなりとしている。

兄さんが憑依したのは誘拐事件の後。私は3歳ぐらいから自我がありました。

「それでどうします？ これから先」

「どうもこうも、流れに身を任せるだけだ。幸い、IS関連の知識は“思い出した”」

まあ、私たちって何度かこの世界体験してますからね。

何度も憶えた事くらい、少し勉強すれば思い出せます。…………私？
ちゃんと勉強してますよ。

「技能関連については……………今度付き合ってくれ」

「分かりました」

もちろん、この場合の付き合ってくれとは「練習に付き合ってくれ」の意味。

後で訓練機とアリーナの使用許可を申請しないと行けませんね……………。

「それと、お前ももう少し『篠ノ之箒』らしくした方がいいんじゃないか？ 俺と2人だけの時はともかく、全員の目があるところだとマズイだろ」

「それもそうですね。……………これでいいか？」

「ああ」

「納得いきませんわっ!!」

甲高いお嬢様ボイスが響き渡る。

セシリアが立ち上がり、そう叫ぶ。

「そのような選出は認められませんっ！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですっ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですかっ!？」

いや、そこまで否定しなくてもいいと思うんだが。

「実力から行けば、私がクラス代表になるのは当然。それを物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困りますっ！ 私はこのよ
うな島国までIS技術の修練に来たのであってサーカスをする気は

毛頭ございせんわっ！」

いやいやいや、さすがにそれは言い過ぎだろうに。

極東の猿呼ばわりされたクラスメイト達も、顔を顰めている。その上彼女はそれに気づいていない。

「いいですかっ！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわっ！」

本当に実力がトップなのかどうかは怪しいところがあるが。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては苦痛……………」

「……………正直、品格を疑うな」

ため息を吐きながらも、箒が立ち上がりセシリアを睨み付ける。

「日本人が極東の猿？ 日本文化が後進的だと？ 戯けた事をぬかすな。文化に差など無い。人種の異なりで見下すなど程度が知れる」

「な、何ですのあなたはッ！！」

「通りすがりの女子生徒だ。覚えておけ」

ビシッとセシリアを指さし、そう言い放つ筈。

いや、通りすがってないだろ。

クラス中の人間の心が、1つになった。……またネタ的な物を持つて来たな。

「ほら一夏、お前も何か言ってやれ」

「……まあ、素人の俺がクラス代表になるって事には、色々思うところがあるだろうな」

実際、クラス代表に推薦したのだって、物珍しさからだろうし。

その部分からすれば、セシリアにとって我慢ならない事なのは明白。

「だが、それとこれとは話が別だ。ただ単純に力チンと来た」

不敵な笑みを浮かべ、セシリアを正面から射抜く。

その喧嘩、買ってやるよ。

「凄いですね、織斑君」

「……………ああ」

管制室で、千冬と真耶は先ほどの模擬戦の映像を確認していた。

戦闘時間54秒。

全方位から放たれるビット攻撃は、まるで後ろにも目があるのか、見えているように全て回避。

ブルー・ティアーズは全武装を完全に破壊され、袈裟切りに放たれた一撃でSEも刈取られ、戦闘不能。

織斑一夏の圧倒的な勝利であった。

「でも、本当に素人なんですか？ 動きを見る限り、どう考えても素人とは……………」

真耶の見立てでは、代表候補生…………下手をすれば国家代表にも匹敵する動きだ。

一夏の稼働時間は10時間にも満たないはずだが、ハッキリ言っており得ない。

「……………あれは昔、剣道をしていた。その影響かもしれん」

そうは言ったが、千冬自身困惑に満ちていた。

中学に上がるまでは剣道を続けていたが、それ以降は特に何か武术をしていたわけではない。

……………いや、3年前の誘拐事件以後は分からない。何故なら、千冬はその日から一夏を可能な限り避け続けていたからだ。

『一夏では無く、他のどこから来た何か』

あの事件以降、一夏は変わった。

急激に大人びたようになったというか、とにかくそれまでの一夏と

は別人のように変化した。

もちろん、誘拐されて何かしらのショックを受けてそうなったのか
もしれない。

最初の頃は出来るだけ千冬も一夏を気遣い、優しく接するようにし
ていたが……。

（あれは、何だ）

千冬の最も優れた能力は何か。

卓越した身体能力？ それとも、人を惹き付けるカリスマ？

彼女の最大の能力、それは物事の本質を感覚的に理解する“直観力”
である。

考えるのではなく、感じる。

研ぎ澄まされた直観力は未来予知にも近く、彼女を最強たらしめた
のもそれが大きい。

そして……一夏の姿をしたそれは、自分では到底理解出来ない“
何か”である事を、彼女は直観的に理解してしまった。否、理解し
ようとしなかった。

だから、逃げた。

理解する事が怖くて、誘拐の際に情報支援を行ったドイツ軍から、教官就任の要請が来た際、幸いとはかりに彼女はドイツへと旅立った。

……理解してしまえば、自分の愛した弟はもういないのだと、そう気づいてしまうのを恐れて。

「織斑先生？　どうかしたんですか？」

「いや、何でも無い」

あ、ありのままに今起こった事を話すぜ！

部屋に戻ってきたら、生徒会長が裸エプロンで待ち構えていたので、思わずヤッてしまった。

何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのか分からなかった。頭がどうにかなりそうだった…………。

性欲だとか催眠術だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…………。

「ポルナレフ風に言わないでください。本音は？」

「ムラムラしてたので食っちゃいました。ごめんなさい」

今現在、箒に向かって土下座を敢行しながらそう言い放った。

いや、思春期男子（精神年齢的にはジジイだらって言った奴、表に出ろ）なんだし、溜まるものはあるんだよ。

ここに来る前はそれなりにモテていたし、ちょっとおしゃれして街に繰り出せば、年上のおねーさま方からお誘いを受ける事も必死。

けど、ここは女の園。美少女揃いでISスーツも無駄にエロい。しかも男なんて用務員さん（かなり年上）しかない。どうやって処理しろと？

「それくらい、私に言ってくればどうとでもしてあげますのに……………」

少し残念そうに呟いているが、俺もその内頼もつとは思っていた。

その矢先、スタイル抜群の生徒会長が水着着用とはいえ、裸エプロンで出迎えた。しかも「おかえりなさいあなた。ご飯にする？ お風呂にする？ それともわ・た・し？」だぞ。お前だったらどうする。

「お持ち帰りですね」

「だろう?..」

「ですが、それとこれとは話が別です。.....本気でどうするんですか」

.....うん、どうしよう。

その生徒会長は現在、疲れ果ててベッドの上で就寝中。なお、男性経験は無かったようです。

出迎えて上述の台詞を言った際、俺が迷いなく抱きかかえてベッドに向かったのは想定外だったらしく、「え、ちよっ、ええっ!?」とかなり取り乱していたが。

とにかく、事を公にされたら俺はおしまいだ。もちろん、そうされないように何かしらする必要があるが.....。

「さすがに、彼女にも面子というものがありますし、事を公にはしないと思いますが……………」

と言うより、寧ろ思春期男子にそんな事したんだから、襲われるかもしれない覚悟込みわけだし、ぶっちゃけ自業自得の部分もある。

……………いや、頂いた俺にそんな事言う資格無いって分かるよ？ でもこれくらい言わせてくれないかな？

「こうなったら覚悟を決めて……………」

「覚悟を決めて？」

「調教しちゃいましょう」

ズッコけた。

……………あれ？ ベッドの上の会長さんが反応したような……………。

「このまま放置しておけば、事を公にはされないかもしれませんが、もしかしたら何かしらの要求をされるかもしれません。主に個人的な楽しみのために」

「……………あり得ないと言えないのが怖いな」

「だからそうならないためにも、誰が上位に立っているのか身体に

教え込む、というわけです。そーゆー経験、無かったわけじゃないでしょう?」

長い人生、確かにそーゆー経験はあった。

例えばだが、何度目かの「リリカルなのは」の時、StSのちよつと前に俺は地上本部の人間……それもレジアス陣営の相当偉い人になった事があった。

そう言う風に立場のある人間になると、色々な意味で狙われる事になる。

スカリエッティもJ.S事件を起こす際、俺が邪魔になると考えたんだろうか、ナンバーズの次女、ドゥーエを送り込んできた。

俺を籠絡。それが無理なら始末して成り代わるように指示されていたみたいだが……うん、その……美味しく頂いてしまった。

これからどうするか悩み、玲夜（当時、六課に潜り込むために本局でそれなりにツテを作っていた）に相談したところ、「徹底的にこちら側に染め上げてしましましょう」と、彼女を調教する事になった。

その後の人生でも、そーゆー事が何度かあったっけ。

……こうして話してるとだが、「調教」とかそーゆー単語使ってる辺り、男としては俺最低だな。

「さ、とりあえずサクッとやっちゃいましょうか」

両手に、とても口には出せない危ない道具を取り、にっこり微笑む
箒。

それがどうしようもない程に怖い。果てしなく怖い。ベッドの上の
会長も怯えてるぞ。

「いえいえ、実はこういう人って虐められて悦ぶ性質なんですよ」

「……………そんなわけないだろ」

「いいえ、私には分かります。怯えてるように見えて、実は心のど
こかで期待してる事が！」

……………とりあえず会長さん、色々と諦めてくれ。コイツもそうだし、
俺も今更止められん。

なお、箒の言葉は当たっていた事が後で判明し、後に別の意味で困
る事になる。

ただ1つだけ言わせてくれ。どうしてこうなった！！

連続転生物語（IS編）（後書き）

どうしよう、書いててかなりノリに乗ってしまった。
私はどうもこーゆー作品を書くのが楽しいらしい。

本格的に、気が向いた時に書いてみようと思います。もちろん連続
転生前提の話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6392v/>

ウィーゼルのネタ倉庫

2011年11月29日14時48分発行